

第1節 分析結果概略

調査を実施した5教科9科目の集計結果について、本節ではポイントとなる概要をまとめたい。なお、各教科・科目の詳細な分析は次節以降で展開したい。

(1)英語の正解率が上昇する一方、日本史・物理の正解率は低下

前回（平成7・8年度）と今回（平成13年度）を比較すると、英語の正解率がやや上昇している。一方、日本史・物理の正解率が大きく下がり、国語・世界史・地理・数学・化学・生物の正解率はやや低下した。（データ1）

(2)文理区分別の傾向

理系の生徒よりも、文系の生徒の正解率の低下が目立つのは世界史・地理・数学と理科の各科目である（ただし物理、化学は文系受験者数が極端に少ない）。これらの科目では、

結果として文・理での正解率格差が発生、または拡大している。（データ2）

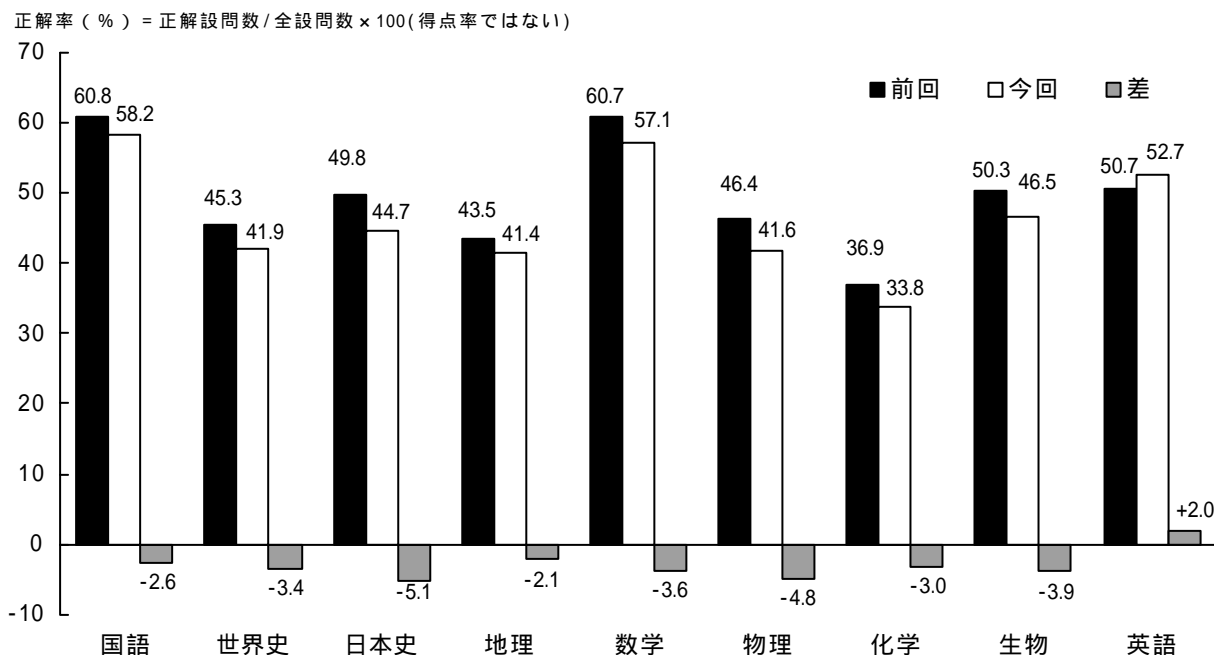
数学については、後ほど志望学部系統別のデータも掲載しているが（データ18）、正解率が低下しているのは「人文・外国語」、「法・経済」、「教育」、「総合・学際」系学部の志望者であり、「理・工・農・水産」系や医療系の各学部では正解率はあまり変動していないか、むしろ上昇している学部系統もある。つまり、理系の学部を志望している生徒に限って言えば、数学の（今回の問題で測定できる）学力の明らかな低下は見られないと言ってよいだろう。

一方、物理は理系の生徒であっても正解率が前回に比べて4.7ポイントも下がっており、日本史では文・理を問わず5ポイント以上、正解率が低下している。

(3)学力層別の傾向

学力層別に見た場合、成績上位層から下位層になるに従って、正解率の低下（前回との

データ1 教科別 正解率 過年度比較一覧



データ2 文理別過年度 正解率

	国語			世界史			日本史			地理			数学		
	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差
文	60.8	58.2	-2.6	45.4	41.3	-4.1	49.5	44.4	-5.1	42.7	39.3	-3.4	55.4	50.6	-4.8
理	60.8	58.1	-2.7	45.2	43.3	-2.0	50.3	45.1	-5.1	44.1	42.4	-1.7	65.9	63.4	-2.4
文・理	0.0	0.1		0.1	-2.0		-0.8	-0.8		-1.4	-3.1		-10.5	-12.9	

	物理			化学			生物			英語		
	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差
文	44.2	33.7	-10.6	36.0	26.8	-9.2	49.7	44.3	-5.4	50.4	52.0	+1.6
理	46.4	41.8	-4.7	37.0	34.1	-2.9	51.8	51.8	±0.0	51.1	53.5	+2.4
文・理	-2.2	-8.1		-1.0	-7.3		-2.1	-7.5		-0.7	-1.5	

* 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100

* 「差」は小数点第2位で四捨五入しているため、表中に表示された数値の差を求めたものと異なる数値が表示されることもある(以下同じ)。

差)が大きくなる傾向が顕著なのは、国語・地理・数学・生物である。これらの科目では、学力層別の格差が前回の調査よりも広がっていることが課題として指摘できる。学力A層においては、前回との正解率の変動が±1ポイント程度に収まっていて、ほとんど変化が見られないのに対し、学力E層では、前回と今回の差が大きく、-7ポイント程度になった科目もある。(データ3)

また、全体としては正解率が上がっていた

英語も、学力層別に傾向を見ると学力の高いA・B層では前回に比べると正解率の上昇が目立つが、下位の学力層になるにつれ上昇は少なく、E層に至ってはやや正解率が低下している。英語も、前回調査時点に比べると、学力間格差が大きくなったと言える。

一方で、世界史・日本史・化学では、成績上位層ほど正解率の下がり幅が大きく、高得点者が少なくなっている。一学期という実施時期から来る現象ではないか(以前の生徒よ

データ3 学力層別過年度 正解率

	国語			世界史			日本史			地理			数学		
	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差
A	78.6	79.4	+0.9	67.8	63.0	-4.9	71.7	64.2	-7.5	58.2	57.5	-0.6	90.2	89.1	-1.1
B	67.7	66.9	-0.8	51.5	47.4	-4.1	56.7	50.4	-6.2	48.5	47.0	-1.5	74.2	71.4	-2.8
C	60.8	58.8	-2.1	43.5	39.7	-3.8	48.3	43.4	-4.9	43.4	40.9	-2.5	61.0	58.8	-2.3
D	54.9	49.9	-5.0	36.6	33.6	-3.0	41.0	37.3	-3.7	38.0	35.1	-2.9	48.4	44.0	-4.4
E	42.6	35.8	-6.8	27.4	26.0	-1.4	31.2	28.1	-3.1	29.4	26.4	-3.0	29.6	22.2	-7.4

	物理			化学			生物			英語		
	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差	前回	今回	差
A	70.5	66.8	-3.7	61.4	56.8	-4.6	70.1	69.0	-1.0	78.7	82.1	+3.5
B	52.6	47.7	-4.9	44.4	39.4	-4.9	57.3	54.6	-2.8	60.1	63.6	+3.5
C	44.2	38.8	-5.4	35.4	31.4	-3.9	49.9	45.6	-4.3	48.1	50.6	+2.6
D	37.6	32.4	-5.3	28.0	25.1	-2.9	42.8	37.4	-5.4	38.7	40.3	+1.6
E	27.2	22.5	-4.7	18.6	16.6	-2.1	31.5	25.7	-5.8	28.0	26.9	-1.1

* 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100

* 学力層の区分については、13ページ参照

りも理科・社会の受験勉強に着手する時期が遅くなっている)との見解もあったが、検証はできていない。物理は高得点者の比率が減ったため、全学力層で平均正解率が低下している。

(4)領域別の傾向

国語・数学・英語で指導要領との関連を見ると、旧課程に比べて表現、並びに音声領域の指導が重視されている英語では、語順整序や読解の特に速読力を必要とする設問でその効果が見られた。また、文法や語彙の領域についても、正解率は下がっておらず、科目全体の正解率は上昇する結果となった。(データ4)

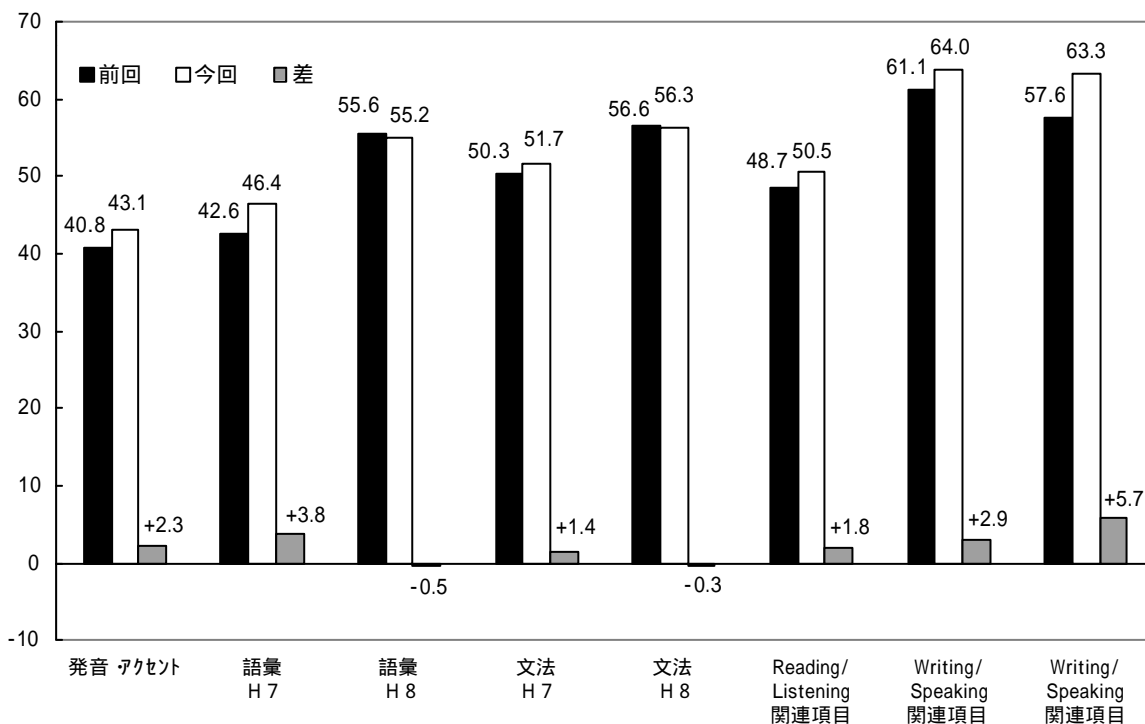
一方、国語は内容読解に関する問題で正解率の大幅な低下傾向が見られ(データ5)、このことは、地理歴史・数学・理科などの他教科における出題意図の読解にも影響を及ぼしているのではないかと推測される。

数学は、前回の3年生にとっても現在の3年生にとっても必修である数学の範囲(2次関数とグラフ、三角比と図形)は正解率がやや上がっている。しかし、前回の課程では必修であったが、現在の3年生では必修ではなくなった領域(数と式、2次関数と方程式・不等式、図形と方程式)に分類した設問は、大きく正解率が下がる結果となった(データ6)。

(5)科目別「得意度」

1990年からの各科目の得意度の推移を見ると、全体として低下傾向にある(データ7)。なかでも、地理歴史、理科の得意度の低下傾向が目立ち、物理・化学・地学は極端に低い数値である。なお、英語は、学力検査の正解率は上昇しているにもかかわらず、得意度は低下している。このことは、子どもが自己を否定的にとらえる傾向が強まっていることの反映ではないかとも推測している。

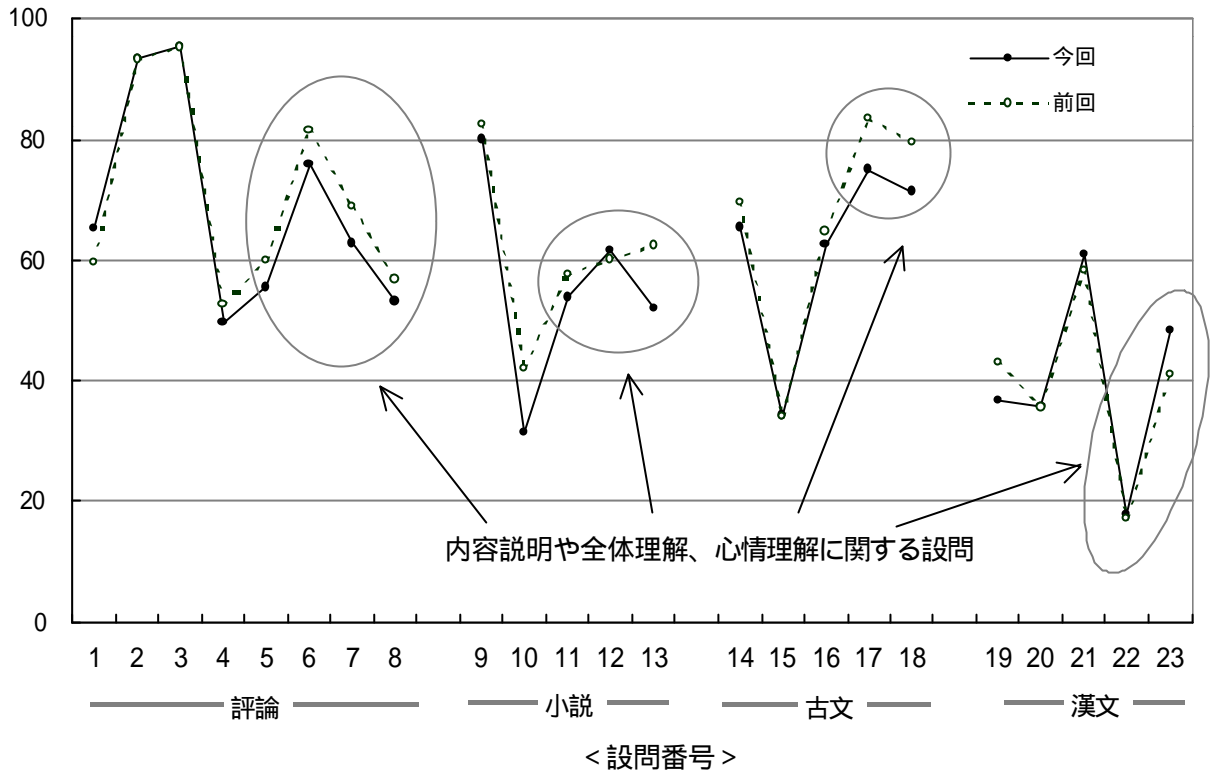
データ4 英語 領域別 過年度比較



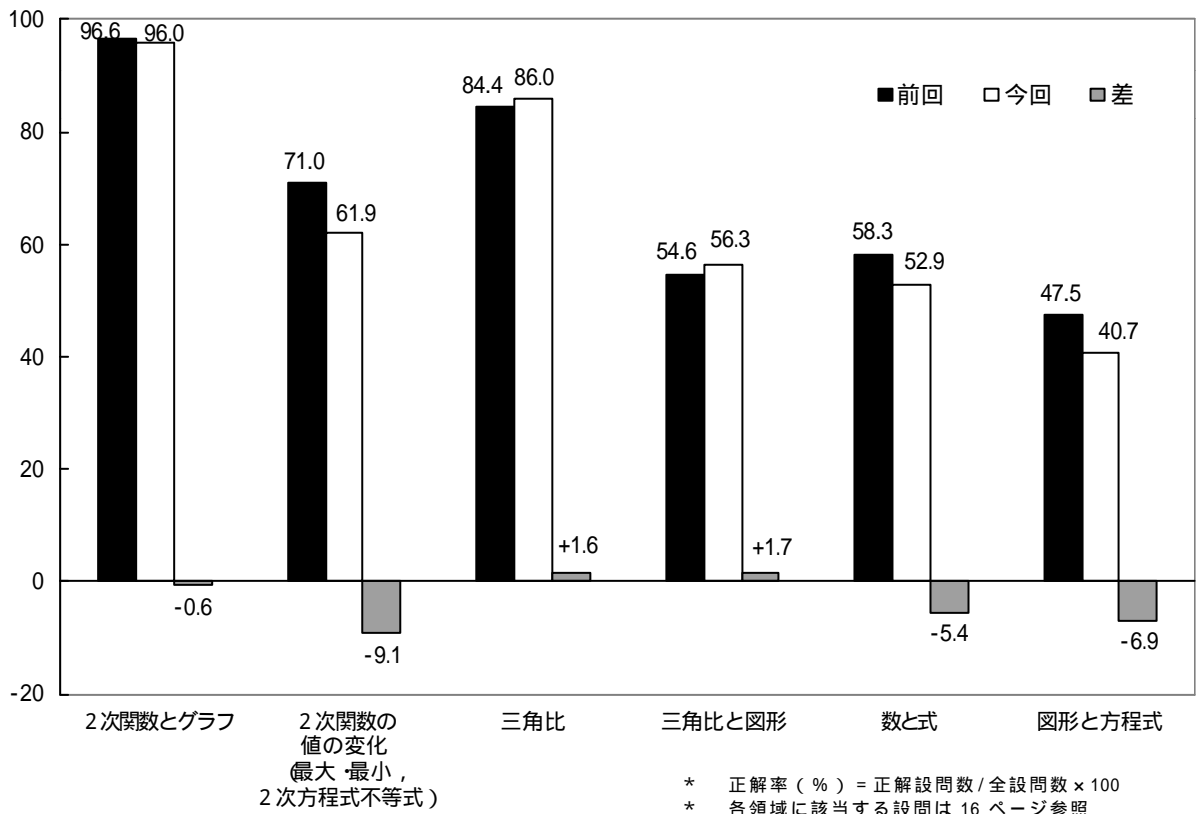
* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * 各領域に該当する設問は 17 ページ参照

データ5 国語 設問別 過年度比較

正解率(%) = 正解者数 / 受検者数 × 100



データ6 数学 領域別 過年度比較



データ7 科目別「得意度」の推移

	1990年	1996年	1999年	2001年
国語	3.003	3.116	2.958	2.865
地歴公民	2.998	3.114	2.759	2.644
世界史			2.722	2.442
日本史			2.811	2.727
地理			2.744	2.762
数学	2.812	2.748	2.962	2.710
理科	2.670	2.743	2.530	2.422
物理			2.268	2.349
化学			2.638	2.237
生物			3.012	2.706
地学			2.200	2.397
英語	2.831	2.746	3.136	2.651
平均	2.863	2.893	2.869	2.658

得意度：各科目について得意だと思える度合いを「とても」～「まったく」などの尺度で回答させ、平均値をとった。3000が基準で数値が大きいほど「得意」と考える度合いが高い。

90～96年はベネッセ教育研究所「学習基本調査報告書」、99年は大学入試センター研究開発部調べのデータを使用。なお、90年96年の得意度は係数をかけて算出した。

全体的には以上のように総括することができるが、ここから先は各教科ごとに分析を試みる。なお教科別分析の視点は、主に以下の4点である。

1. 科目別の概要

前回との正解率推移、男女別・文理別・志望学部系統別などの特徴

2. 領域別・設問別分析

3. 学力層別分析

偏差値60以上(A層)から45未満(E層)までの学力層別の推移や差異の分析

4. 正解率格差の大きい設問分析

偏差値60と50を境にして、正解率に大きな差がある設問が多い。差の大きい設問にどのような特色があるかを考える。

第2節 国語

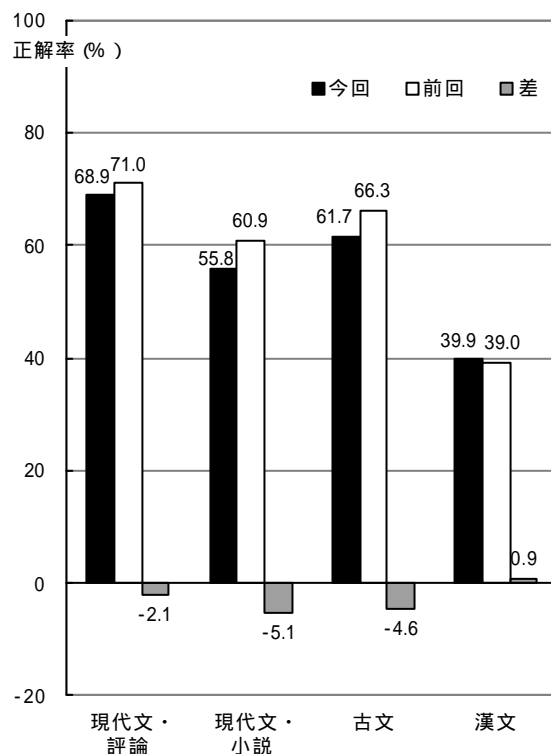
サンプル集団全体の平均正解率は、前回と比較して約2.6%低下した。偏差値に換算すると約2ポイントの低下である。また文系・理系の正解率差はほとんどなく、男子よりも女子が2%以上正解率が高い(データ8-2)。

志望学部系統別では、目立って上昇しているところはなく、法・経済、教育、総合・学際系での正解率低下が大きい。

領域別に見ると、現代文と古文での正解率低下が大きく、漢文はほとんど変化していない。(データ8-1)

さらに設問別に見ると、データ5に示したように、評論・小説・古文の内容説明・心情理解などに関連する設問に前回と比較して4～10%程度正解率の低下した設問が多かった。

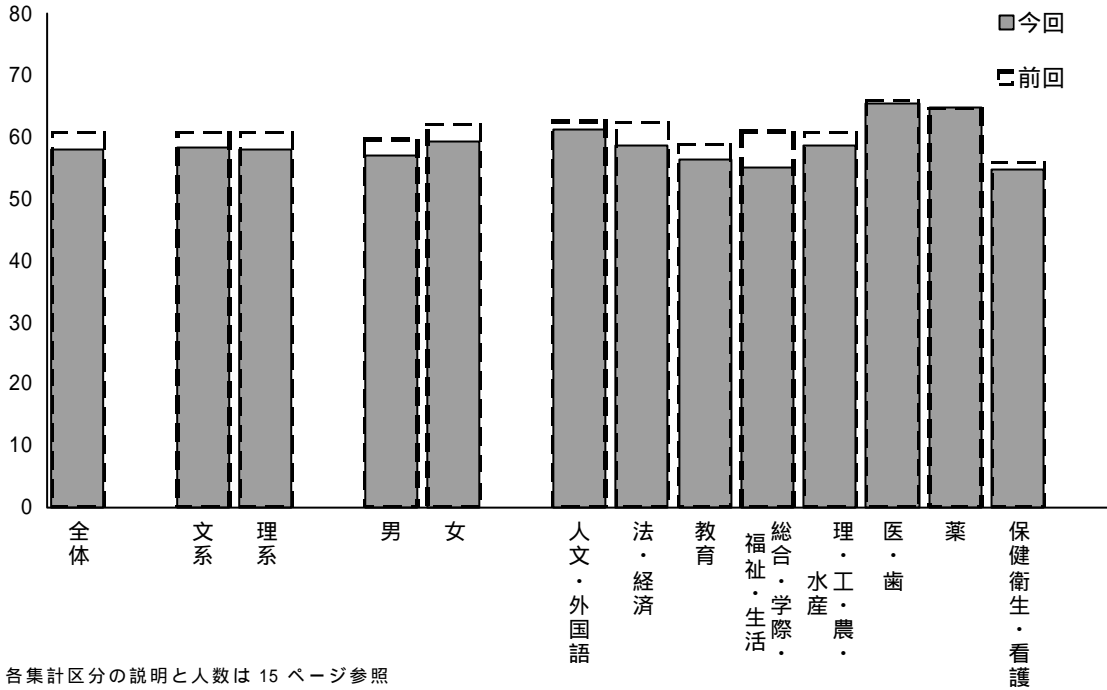
データ8-1 国語 領域別 過年度比較



* 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
* 各領域に該当する設問は、16ページ参照

データ8 2 国語 正解率 概況

国語 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外 国語	法・経済	教育	総合・ 学際・ 福祉・生活	理・工・ 農・ 水産	医・歯	薬	保健衛 生・看護
今回	58.2	58.2	58.1	56.9	59.4	61.4	58.8	56.5	55.1	58.5	65.6	65.0	54.8
前回	60.8	60.8	60.8	59.6	62.2	62.6	62.4	58.9	60.9	60.7	66.1	64.7	55.9
差	-2.6	-2.6	-2.7	-2.7	-2.8	-1.2	-3.6	-2.5	-5.8	-2.2	-0.5	0.3	-1.1



* 各集計区分の説明と人数は 15 ページ参照
 * 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

このように、「内容読解に関する設問」での正解率低下が大きいという点が、今回の調査結果で最も注目すべき点ではないかと思われる。実際、国語の先生方からは、「語彙や言葉に関する地力（基本的な力）がなくなってきており、現代文の力が下がっているのがよくわかる」、「表現や討論などでは以前より良くなっていると思う側面もあるが、思考力が低下しているのではないか」といった意見が出された。国語における読解力の低下は、恐らく、他の教科で設問文などを読解する力にも影響しているのではないかと想像できる。

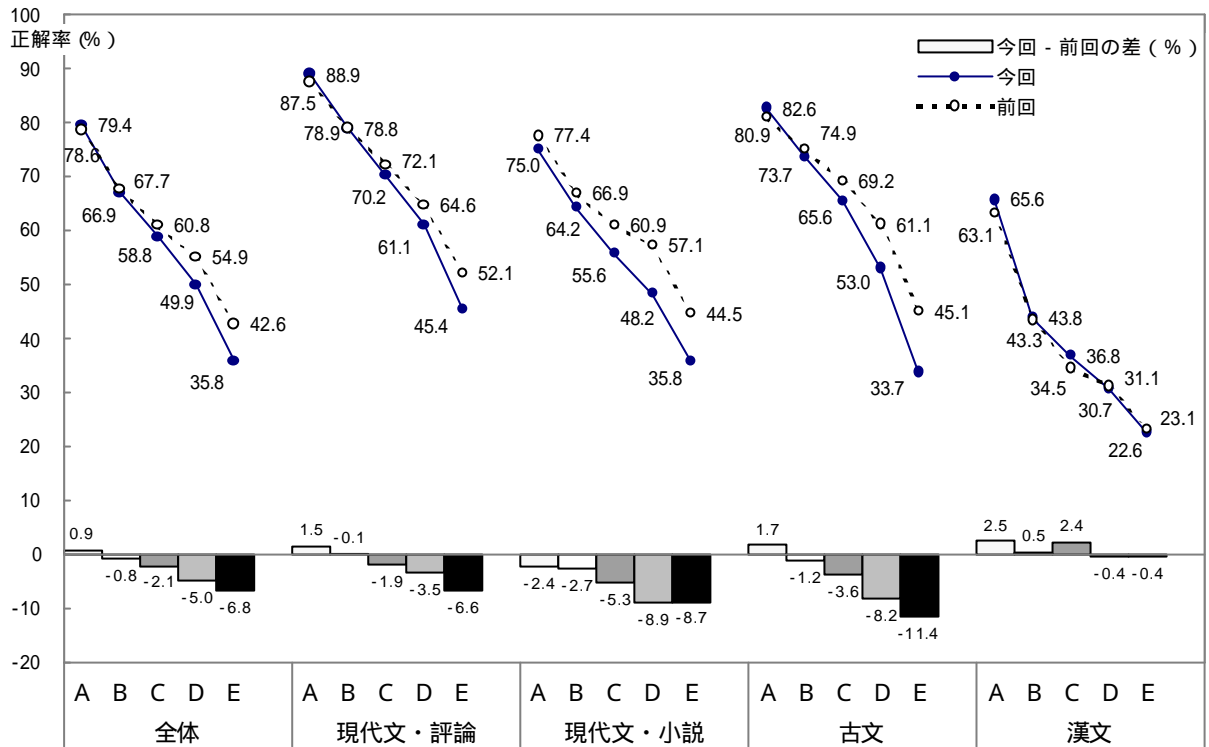
データ9に見られるように、特に学力D・E層での正解率低下が著しく、成績層による学力の格差も広がっていることがわかる。国語という教科の性質上、高校段階でのみ読解力が低下しているということは考えにくく、

小中学校段階での問題も大きいと思われる。高校現場では、「朝の始業前に読書の時間を設ける」工夫をしたり、「評論や文学作品の授業で、今までよりも一つの作品に時間をかけて深く読ませる」など、読解力の低下に抗するための方法がとられているが、読解力に関しては教科を超えて先生方の悩みは深い。

次に成績層別の正解率格差が大きい設問（差がついた問題）を見てみる(データ10)。難関大合格可能性の目安となる偏差値60前後で大きく差がついているのは主に漢文の設問と、評論・小説の内容読解設問である。

一方、偏差値50の前後では、評論と古文の問題で差がついている。

データ9 国語 学力層別 過年度比較 (領域別)



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率) * 各領域に該当する設問は 16 ページ参照

データ10 国語 偏差値60, 50前後で正解率格差の大きい設問 (単年度集計)

	学力層間の正解率差	
	20%以上	10%以上 20%未満
A層とB層の正解率差 が大きい(偏差値60前後で格差のある)設問	漢文 問19	評論 問1
	漢文 問20	評論 問4
	漢文 問22	評論 問5
	漢文 問23	評論 問7
		評論 問8
		小説 問10
C層とD層の正解率差 が大きい(偏差値50前後で格差のある)設問		小説 問13
		古文 問14
		古文 問16
		評論 問4
		評論 問5
		評論 問6
		評論 問7
		古文 問14
	古文 問16	
	古文 問17	
	古文 問18	

* 正解率 (%) = 正解者数 / 受検者数 × 100
 * 学力検査問題の全設問は巻末に掲載

評読問7・8 次の「は本文の読後感を話し合ったものである。この中から本文の内容に合致しないものを二つ選べ。順序は問わない。解答欄には [7] [8] 。

漢文 問22 傍線部「治非」使「堯・舜」也則必使「桀・紂」乱之の解釈として最も適切なものを次の「の」のうちから二つ選べ。解答欄には [22] 。

政治とは、堯や舜に任せられないのなら、桀や紂に任せて世を乱しても仕方がないという無責任なものではない。政治とは、堯や舜に任せて失敗しても、必ず桀や紂が失敗するとは限らないことだ。その妙味があるといえる。政治を堯や舜に任せた方がよいのか、それとも桀や紂に任せた方がよいのかという迷いが、世の乱れを誘った。政治を堯や舜に任せて失敗したのは、桀や紂に任せても必ず失敗し、世を乱すのは当然といえる。政治については、堯や舜に任せざるを得ないか、さもなければ必ず桀や紂に任せざるを得ない方法しかない。

漢文 問19, 20 「重傷線部(ア)」「問末之議」の意味として最も適切なものを次の空欄の「」の中に入力せよ。解答欄には [19] [20] 。

(ア) 中手
 なみの速の馬
 よりすべりの名馬
 乗り継ぎ駅役人
 今の名御者
 普通の腕前の御者

(イ) 問末之議
 無責任で曖昧な意見
 両極端の場合しか考えない意見
 とまだおれで終わってしまふ意見
 終始一貫した矛盾のない意見
 枝葉末節にこだわらる意見

第3節 地理歴史

1. 世界史

平均正解率は前回と比較して3.4%低下した。これを偏差値に換算すると約2ポイント低下したことになる(データ11)。また、理系よりも文系の平均正解率が2%以上多く下がっており、今回は理系の平均正解率の方が高くなった。男女別では、男子の下げ幅が女子の倍以上だったが、それでも3%以上男子の方が女子よりも正解率が高い。志望学部系統別では、正解率が大きく下がったのは法・経済系と医歯系で5%を超える。ほぼ横ばいなのは、薬学系、理工農系、保健・看護系で、その他は2~3%程度低下している。

正解率格差の大きい設問としては、偏差値60の前後で「中国史」と「17・18世紀のヨー

ロッパと世界の領域」が多かった。一方偏差値50前後では、リード文を読解した上で知識を問うような標準的な設問で差が付いている。(データ12)

2. 日本史

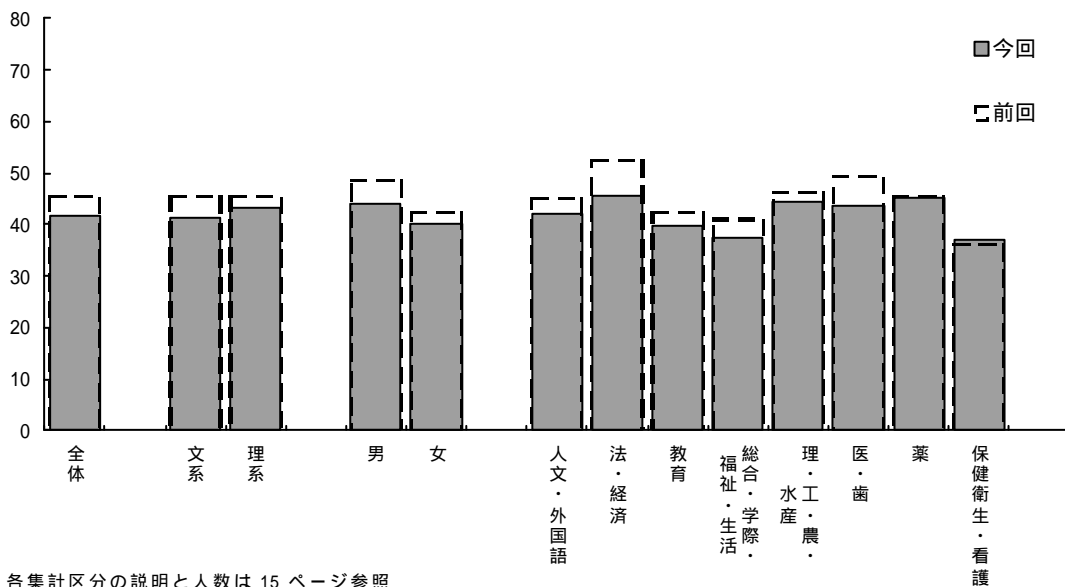
平均正解率は、前回と比較して約5.1%低下した。これは偏差値に換算すると約3.5ポイント低下したことになる(データ13)。文理ともに平均正解率が5%以上下がっており、地理歴史の中では、もっとも下げ幅が大きい科目となった。また、男子の方が女子よりも2%以上正解率の下がり幅が大きい。

志望学部系統別では、大きく下がっているのは教育系と総合・学際系、医歯系で5%を超えている。その他の系統も軒並み低下しており、横ばいや上昇の学部系統はない。

世界史と日本史のトータルで見ると、医学

データ11 世界史 正解率 概況

世界史 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外 国語	法・経済	教育	総合・学際・ 福祉・生活	理・工・農・ 水産	医・歯	薬	保健衛生・ 看護
今回	41.9	41.3	43.3	43.9	40.2	42.0	45.8	39.9	37.4	44.6	43.8	45.4	37.1
前回	45.3	45.4	45.2	48.6	42.3	45.2	52.5	42.4	40.9	46.1	49.1	45.4	36.1
差	-3.4	-4.1	-2.0	-4.6	-2.0	-3.2	-6.7	-2.5	-3.5	-1.5	-5.4	0.0	1.0



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

データ12 世界史 偏差値60, 50前後で正解率格差の大きい設問(単年度集計)

	学力層間の正解率差	
	20%以上	10%以上 20%未満
A層とB層の正解率 差が大きい(偏差値 60前後で格差のあ る)設問	第1問 9	第1問 2
	第1問 11	第1問 3
	第1問 12	第1問 4
	第1問 13	第1問 5
	第2問 14	第1問 7
	第2問 15	第1問 8
	第2問 16	第1問 10
	第2問 22	第2問 18
	第3問 26	第2問 19
	第3問 28	第2問 23
	第3問 29	第3問 24
	第4問 41	第3問 25
	第4問 42	第3問 27
	第4問 43	第3問 30
		第3問 32
		第4問 33
	第4問 35	
	第4問 36	
	第4問 44	
C層とD層の正解率 差が大きい(偏差値 50前後で格差のあ る)設問	第4問 35	第1問 4
		第2問 17
		第2問 18
		第3問 28
		第4問 33
		第4問 40
		第4問 42
		第4問 45

第1問 12 下線部 に関連して述べた次の文 ~ のうちから、正しいものを一つ選べ。

この同盟は、長く対立してきたハプスブルク家とロマノフ家の対立を解消した。
この同盟によってもハプスブルク家はシュレジエンを奪回できなかった。
この同盟によって、ポーランドが3度にわたって侵略され解体された。
この同盟は、スペインとオーストリアとの合同をもたらした。

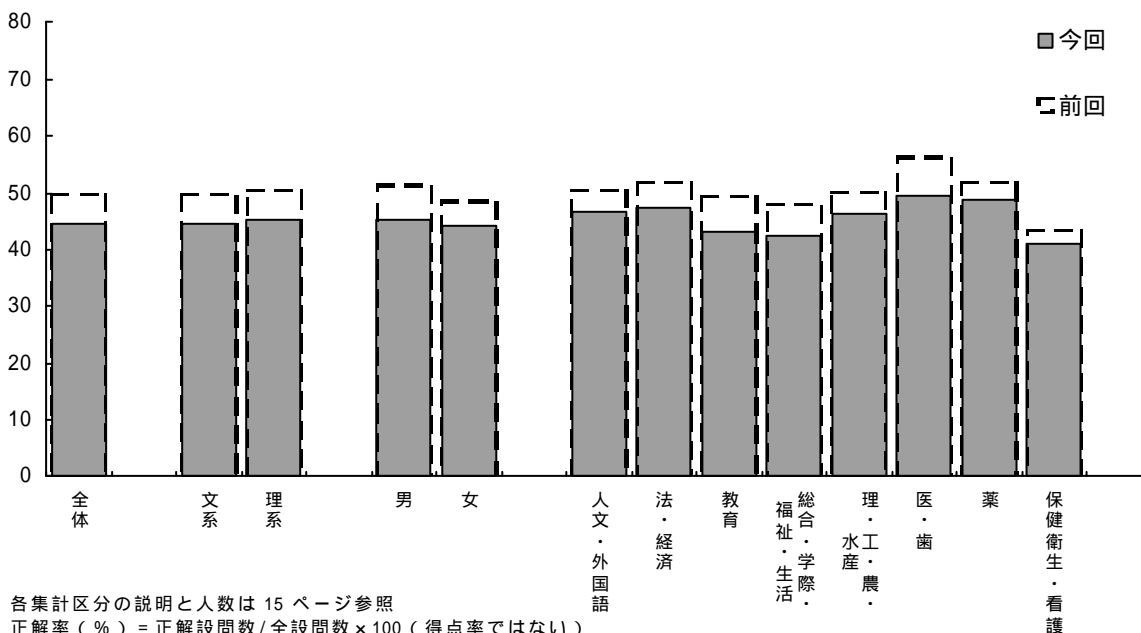
第1問 13 本文Dの文章に述べられている戦争と同じころの情勢について述べた次の文 ~ のうちから、最も適当なものを一つ選べ。

イギリス東インド会社の書記クライヴの活躍でイギリスがフランスとインド土侯の連合軍を破った。
イギリスが3度にわたるオランダとの戦争に耐え抜き、新大陸のオランダ領のほとんどを奪った。
スペインのセルバンテスがオスマン＝トルコとの戦いで傷ついたが、スペインを含む連合軍が勝利した。
スペインやヴェネツィアなどの連合軍がオスマン＝トルコとギリシア西岸の地で戦って敗れた。

* 正解率(%) = 正解者数 / 受検者数 × 100
* 学力検査問題の全設問は巻末に掲載

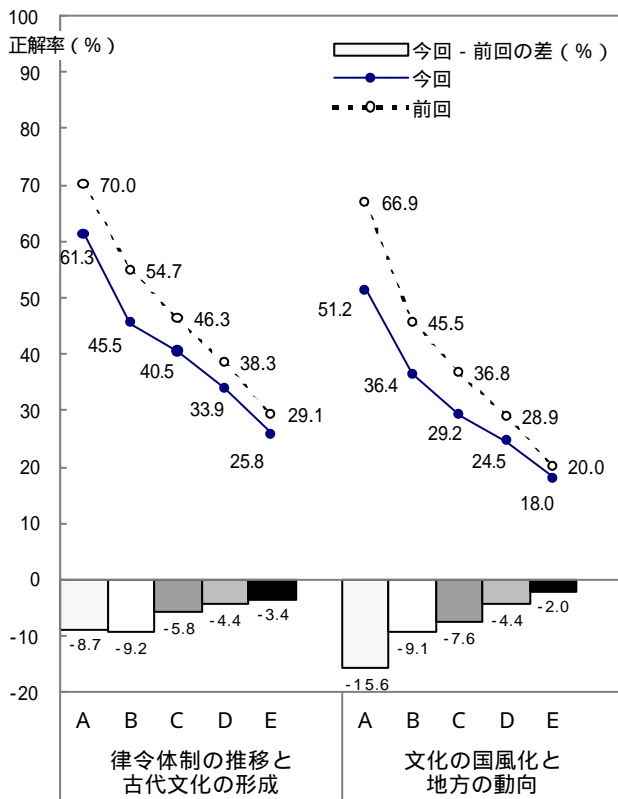
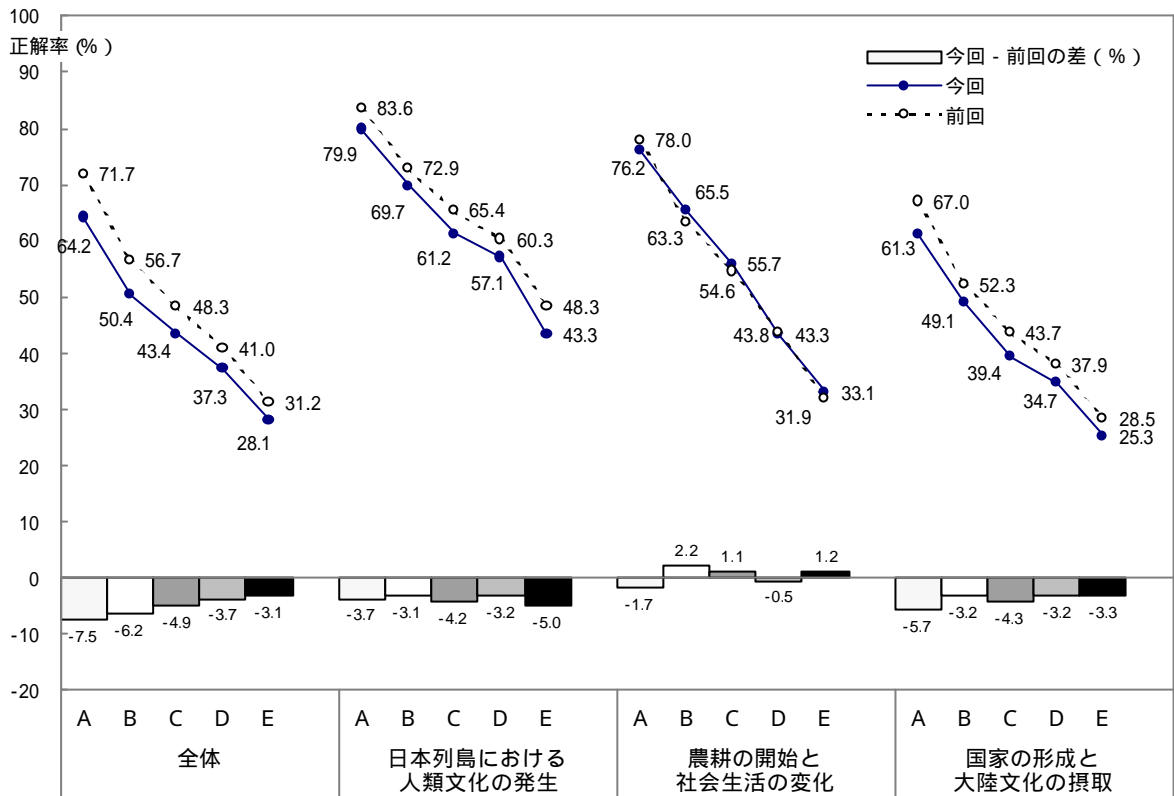
データ13 日本史 正解率 概況

日本史 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外 国語	法 経済	教育	総合・学際・ 福祉・生活	理・工・農・ 水産	医 歯	薬	保健衛 生 看護
今回	44.7	44.4	45.1	45.1	44.3	46.8	47.2	43.2	42.4	46.1	49.3	48.6	41.1
前回	49.8	49.5	50.3	51.2	48.4	50.4	51.8	49.3	47.8	50.0	56.1	51.7	43.4
差	-5.1	-5.1	-5.1	-6.1	-4.1	-3.7	-4.6	-6.1	-5.3	-3.9	-6.8	-3.1	-2.3



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
* 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

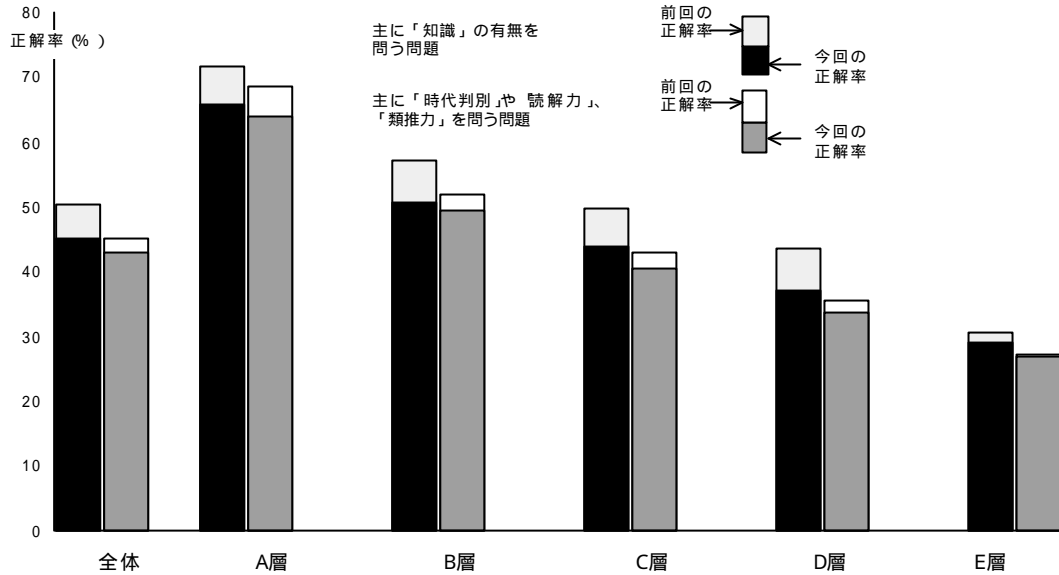
データ14 日本史 学力層別 過年度比較（領域別）



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率)
 * 各領域に該当する設問は 16 ページ参照

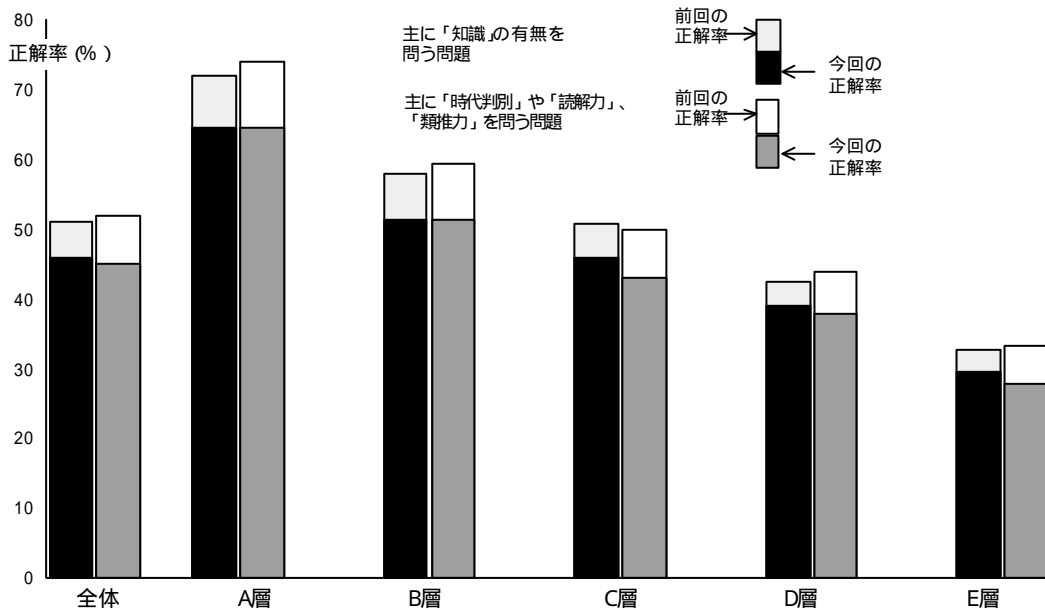
データ15 世界史 設問タイプ別 過年度比較

	全体 正解率		学力レベル									
	前回	今回	A層		B層		C層		D層		E層	
			前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回
主に「知識」の有無を問う設問	50.6	45.3	71.8	65.8	57.1	50.7	49.7	43.8	43.6	37.1	30.7	29.0
主に「時代判別」や「読解力」、「類推力」を問う問題	45.3	42.9	68.8	64.1	51.9	49.4	43.1	40.5	35.5	33.8	27.4	27.0



データ16 日本史 設問タイプ別 過年度比較

	全体 正解率		学力レベル									
	前回	今回	A層		B層		C層		D層		E層	
			前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回	前回	今回
主に「知識」の有無を問う設問	51.2	46.0	72.0	64.4	58.1	51.3	50.8	45.9	42.4	38.9	32.7	29.6
主に「時代判別」や「読解力」、「類推力」を問う問題	52.0	44.9	73.9	64.7	59.2	51.3	49.8	43.0	43.9	37.8	33.2	27.9



データ 15・16 とも

* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
* 各タイプに該当する設問は 17 ページ参照

部・歯学部志望者では歴史科目を選択する人数も減り、なおかつ正解率も下がっている。

また日本史は地理歴史のなかでもっとも正解率の低下した科目であるが、他の教科・科目と異なり、下位層よりも上位層で正解率の低下幅が大きいことがわかる（データ14）。

世界史と日本史については、設問を「主に『知識』を問う設問」とその他の設問（主に『時代判別』や『読解力』、『類推力』を問う設問）に分けて正解率の変動を見た（データ15・16）。その結果、知識事項に関する設問は世界史も日本史も前回から5%程度下がっているが、知識以外の設問は日本史のみ大きく下がっている（-7.1%）。この差が日本史の正解率低下の要因となったようだ。

3. 地理

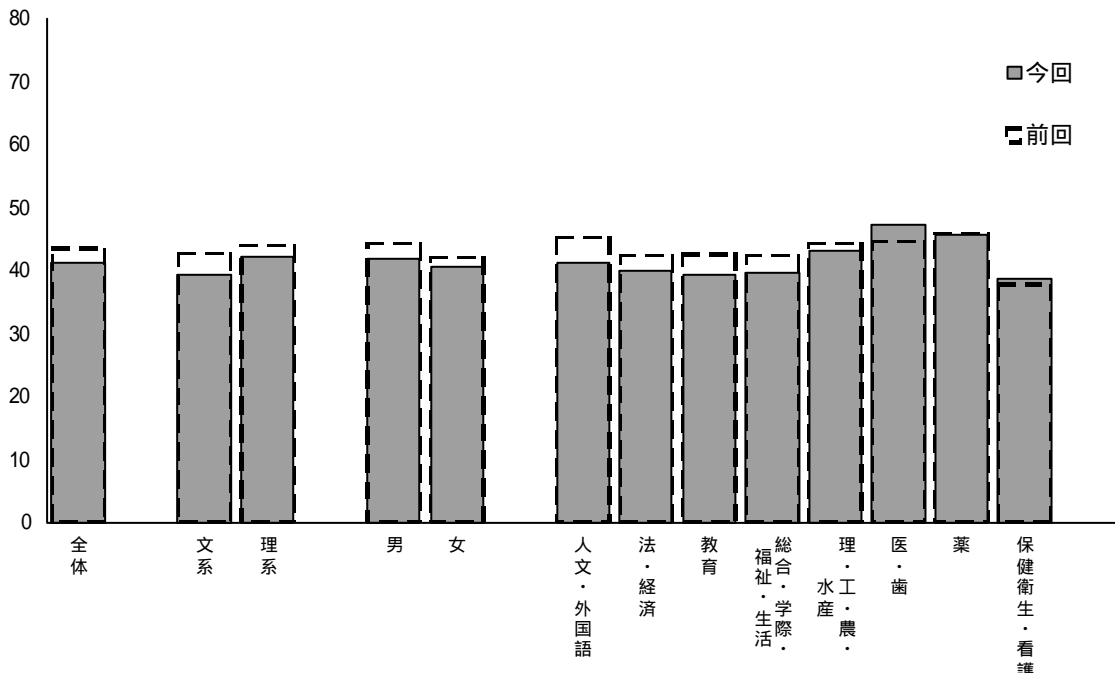
平均正解率は、前回と比較して2.1%低下した。偏差値に換算すると約1.5ポイント低下したことになるが、地理歴史の他の科目に比べると正解率の低下幅が最も小さい。（データ17）。

また、歴史の2科目については受検者数が減っていたが、地理は受検者数、受検率（選択率）とも前回より増えている（第1章12ページ）。

志望学部系統別では、医歯系、保健衛生・看護系で正解率が若干上昇しており、薬学系では、ほとんど変化がない。その他の全ての系統では若干下がっている。

データ17 地理 正解率 概況

地理 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外国語	法・経済	教育	総合・学際 福祉・生活	理・工・農 水産	医・歯	薬	保健衛生・看護
今回	41.4	39.3	42.4	41.9	40.7	41.2	39.9	39.3	39.7	43.1	47.2	45.7	38.8
前回	43.5	42.7	44.1	44.4	42.0	45.2	42.5	42.6	42.4	44.4	44.6	45.8	37.8
差	-2.1	-3.4	-1.7	-2.5	-1.3	-4.0	-2.6	-3.3	-2.6	-1.3	2.6	0.0	1.0



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

第4節 数学

平均正解率は、前回と比較して3.6%低下した。これは偏差値に換算すると約2ポイント低下したことになる。また、文理の平均正解率差が約13%、男女のそれが約5%強と前回に比べて広がり、他の科目と比較しても、文理差・男女差が顕著である。

志望学部系統別では、薬学系、保健衛生・看護系で平均正解率はやや上がり、法・経済系、総合・学際系では大きく下がった。その他の文系の各学部系統も数%下がっている。

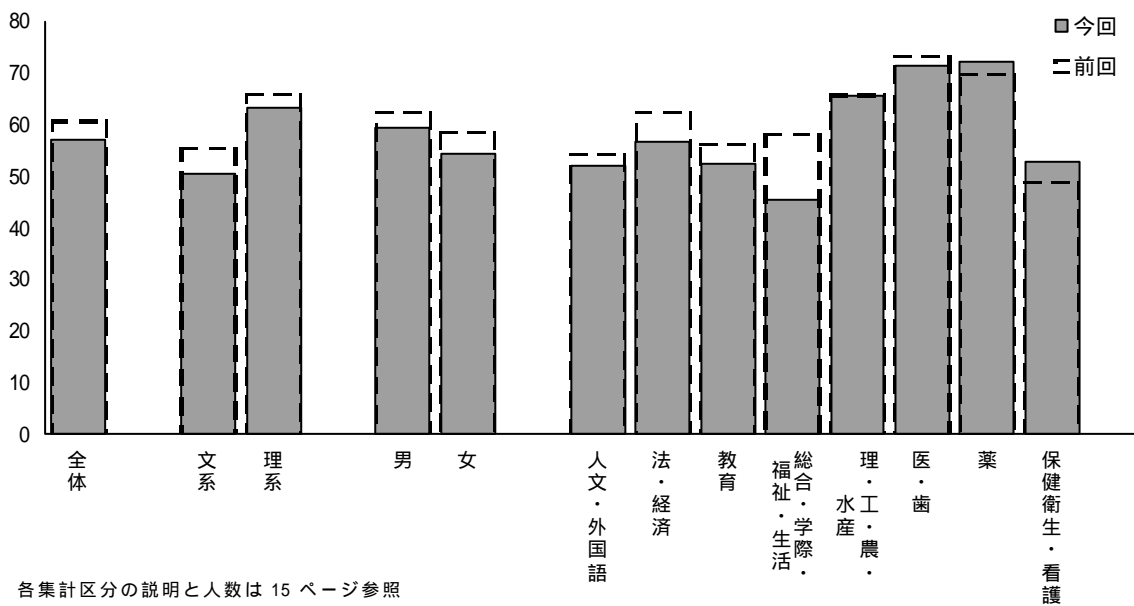
一方、理工農系、医・歯系では全設問の平均正解率は、大きくは下がっていない。つまり理系の各学部系統を志望している生徒に限

ると、数学の（今回の問題で測定できる）学力に明白な低下は見られないと言ってよいだろう（データ18）。

しかし、現場の先生方からは「（日頃の指導の中では）計算力の低下をこの調査結果よりも、もっと強く感じている」、「思考過程を誘導する設問が無い記述式の高度な計算力を要求する問題で比較ができたなら、より厳しい結果が出たのではないか」などの意見が出された。日頃の指導の中では、調査結果が示す以上に、以前の生徒に比べ、計算力が低下していると感じている旨の意見が多く出された。だが、それ以上に気になるのは、「論理的思考力・抽象的思考力が低下しているのではないか」という指摘である。データ19や前掲のデータ6に見られるように、現行の指導要領

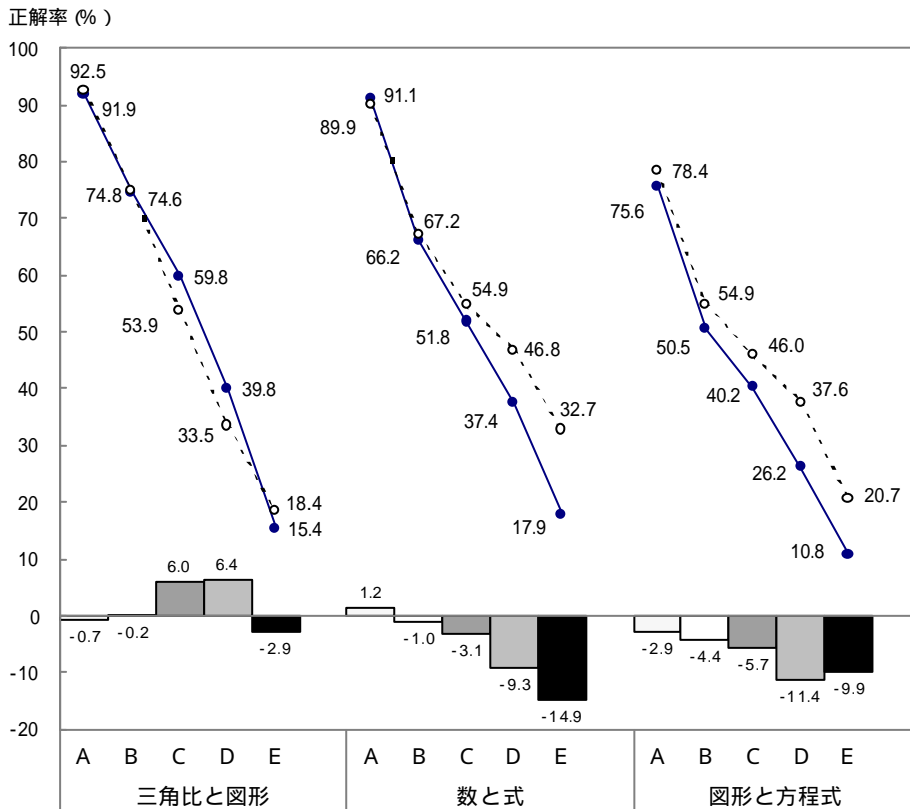
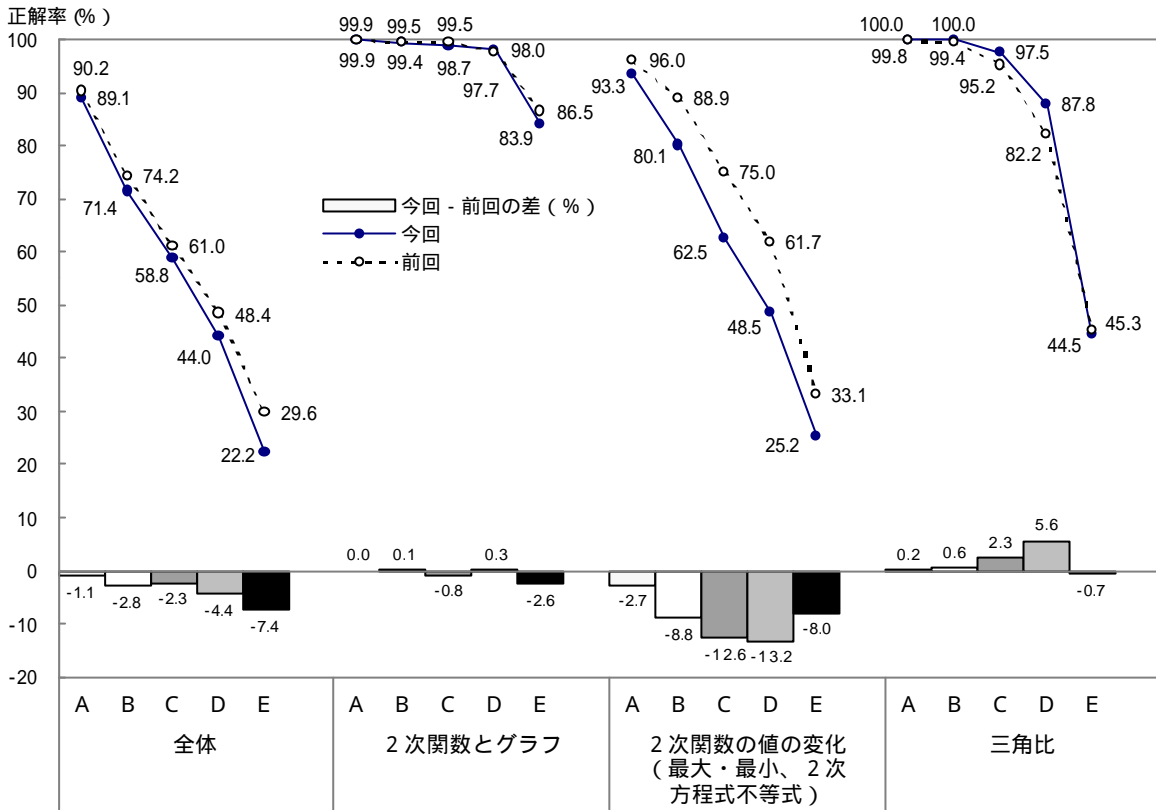
データ18 数学 正解率 概況

数学 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外 国語	法・経済	教育	総合・学際・ 福祉・生活	理・工・農 水産	医・歯	薬	保健衛 生・看護
今回	57.1	50.6	63.4	59.7	54.4	52.0	56.7	52.5	45.7	65.7	71.5	72.3	52.8
前回	60.7	55.4	65.9	62.4	58.5	54.2	62.3	56.2	58.1	65.8	73.3	69.8	48.9
差	-3.6	-4.8	-2.4	-2.7	-4.1	-2.2	-5.6	-3.7	-12.4	-0.1	-1.8	2.5	3.9



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

データ19 数学 学力層別 過年度比較 (領域別)



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率) * 各領域に該当する設問は 16 ページ参照

データ20 数学 偏差値60、50前後で正解率格差の大きい設問（単年度集計）

	学力層間の正解率差	
	20%以上	10%以上 20%未満
A層とB層の正解率差が大きい（偏差値60前後で格差のある）設問	第1問オ・キ 第1問ク・コ 第2問ケコ 第2問サシ 第3問コ・シ 第3問スセ	第3問ア 第3問イ・エ 第3問クケ
C層とD層の正解率差が大きい（偏差値50前後で格差のある）設問	第2問オ・キ 第2問ク 第3問イ・エ 第3問オ・キ 第3問クケ	第1問エ 第1問オ・キ 第1問ク・コ 第2問ケコ 第3問ア

* 正解率（%）= 正解者数 / 受検者数 × 100
* 学力検査問題の全設問は巻末に掲載

第2問 (3) (2)において、ACとBDの交点をEとすると、
 $(\text{ABEの面積}) : (\text{ADEの面積}) = \boxed{\text{ケ}} : \boxed{\text{コ}}$
 であり
 $AE = \frac{\boxed{\text{サ}}}{\boxed{\text{シ}}}$
 である。ただし、 $\boxed{\text{ケ}} : \boxed{\text{コ}}$ は最も簡単な整数比で表せ。

第1問 (2) 整数 $P(x)$ を $x^3 - 1$ で割ったときの余りは $x^2 - x + 6$ である。

(1) $P(x)$ を $x - 1$ で割ったときの余りは $\boxed{\text{工}}$ である。
 また、 $P(x)$ を $x^2 + x + 1$ で割ったときの余りは
 $\boxed{\text{オカ}}x + \boxed{\text{キ}}$
 である。

(2) $xP(x)$ を $x^3 - 1$ で割ったときの余りは
 $\boxed{\text{ク}}x^2 + \boxed{\text{ケ}}x + \boxed{\text{コ}}$
 である。

第3問 (3) a が $\boxed{\text{クケ}}$ のとき、四角形ORPQは平行四辺形となる。
 とくに、四角形ORPQが長方形になるのは、

$$a = \frac{\boxed{\text{コサ}}}{\boxed{\text{シ}}}$$

のときで、その面積は、
 $\boxed{\text{スセ}}$
 である。

でも必修である数学 の範囲では正解率が多少上がっている領域も見られるが、現行の指導要領になってから必修以外に移行された領域では正解率が大きく下がっている。必修領域外に移行し、かつ抽象的な思考を必要とする設問の中には、正解率（正解者数 ÷ 受検者数 × 100）が15%以上低下したものもある（例、第1問エ 前回正解率 92.4% 今回73.6%；差 - 18.8%、第3問イ エ 前回正解率 69.4% 今回53.0%；差 = - 16.5%）。

ある先生からは、多くの問題を演習するよりも、少ない問題をじっくり考えさせる授業を心がけるという意見が出された。「分からない問題に遭遇したときに20分程度以上考えてみる」という項目が、数学の成績と相関が高かったことを考えると、（特に2、3年生時に）重要な対策であるように思える。

数学の場合、全体的に学力層間での正解率差が大きいのが特徴であるが、特に偏差値60

前後を境にする学力A層とB層の間で正解率の差が目立つのは各大問の最後の設問であり、応用力を必要とする設問である（データ20）。

また、座標平面上の図形に関する大問（第3問「図形と式」）では、ほとんど全ての設問でA層とB層の正解率差は大きく開いているし、前回調査と比較してもその差は大きくなっている。難関大学を目指したいB層の生徒には、思考力を重視する問題をじっくり考えさせる指導が重要になっているのではないだろうか。

一方、偏差値50前後では、各大問の中盤の設問がキーとなっており、標準的な問題が確実にできるかどうか重要になっている。

第5節 理科

1. 物理

平均正解率は、平成7年度と比較して4.8%低下した。これは偏差値に換算すると約3ポイント低下したことになる。(データ21)

ただし、第1章(12ページ)でも触れたように今回の学力検査では実施時間の制約上、通常の模擬試験であれば2科目を受検するような生徒であっても、1科目しか受検していない場合が多い(理科2科目選択率は前回40%、今回20%)。さらに、大半の生徒は「得意な1科目」を受検しているので、理科の中では物理を得意とする生徒の集団に絞られたにもかかわらず(物理の選択率は前回の27%から今回20%へと低下している)、正解率が大幅に下がっていることが指摘できる。

志望学部系統別では、薬学系、保健衛生・看護系では平均正解率がやや上がり、医・歯系ではほとんど変化していない。一方で、物理受験者の大多数を占める理工農系では、正解率が4.4%下がっている。

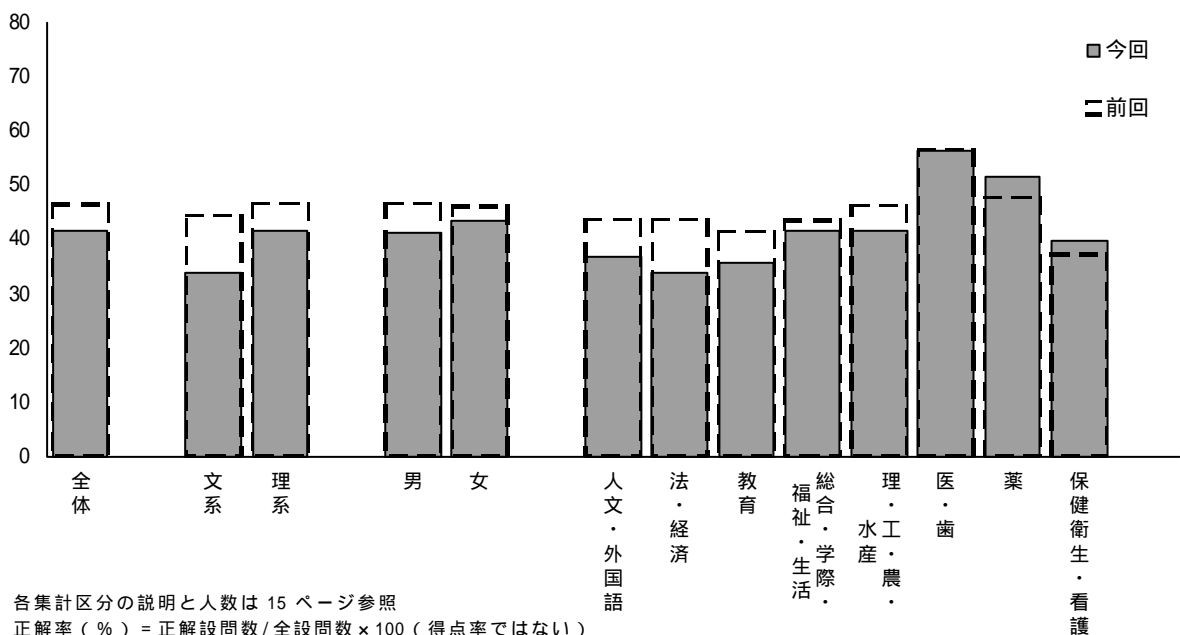
なお、文系学部を受検者は非常に少ないので、物理に関しては前回との比較が難しい。

領域別に見ると、正解率の低下が目立つのは「力と運動」、「運動量」、「熱とエネルギー」などの領域である。「波の性質」と「光波」では正解率がそれほど下がっていないが、これらはもともと平均正解率が低かった領域である(データ22)。

学力層別に考察してみたい。前回の調査に比べ、高正解率の生徒の比率が減り、各層とも全設問集計で正解率は3.7~5.4%下がっている。

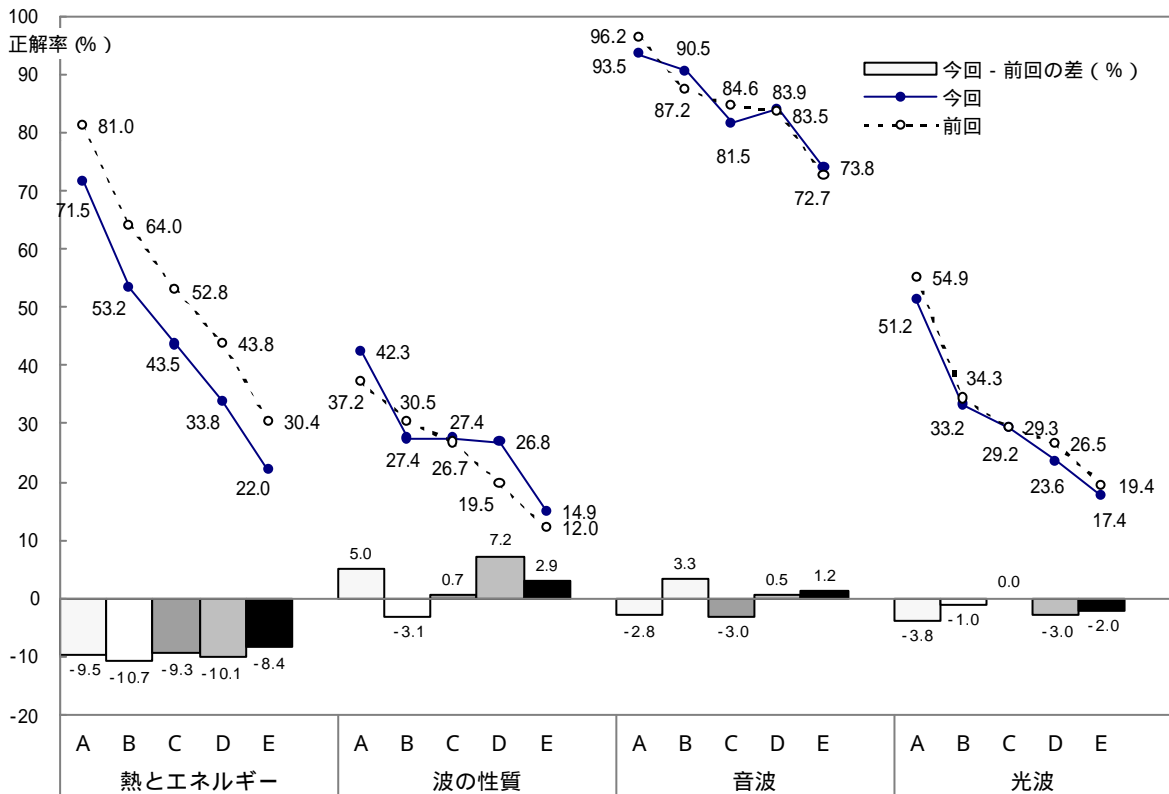
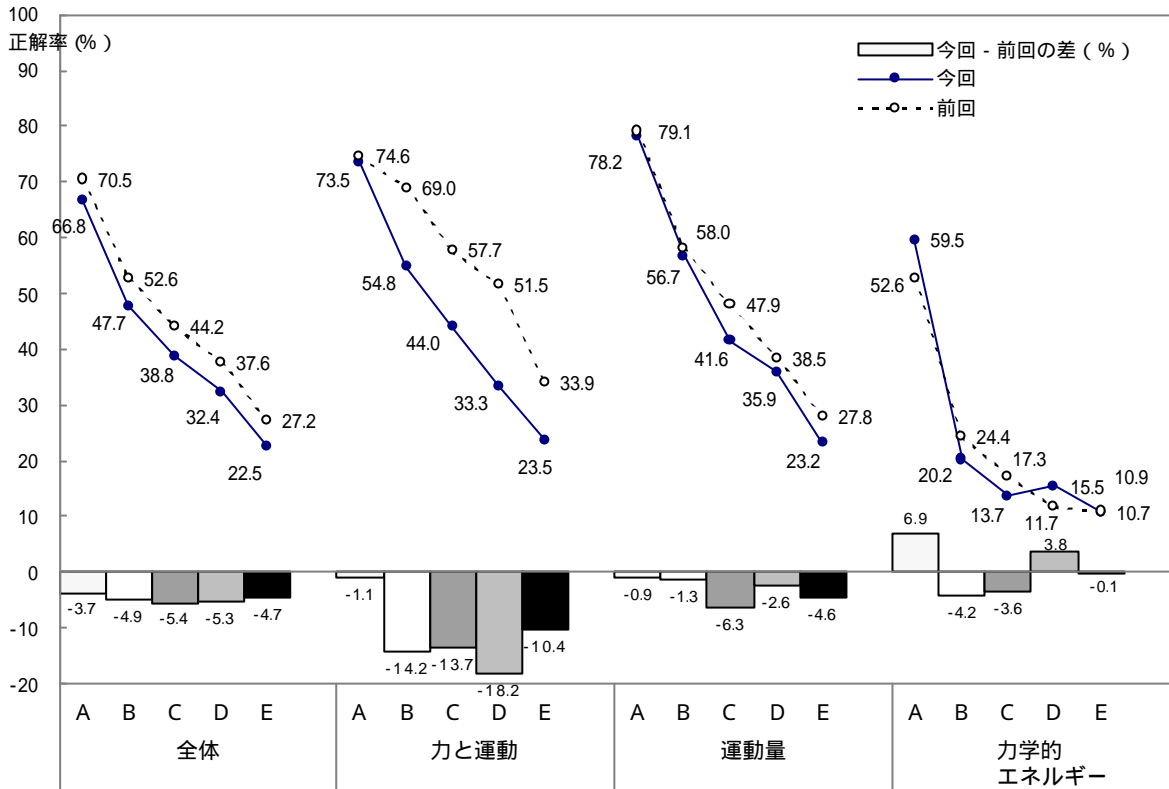
データ21 物理 正解率 概況

物理正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外国語	法・経済	教育	総合・学際・福祉・生活	理・工・農・水産	医・歯	薬	保健衛生・看護
今回	41.6	33.7	41.8	41.3	43.3	36.7	33.9	35.7	41.8	41.7	56.2	51.4	39.8
前回	46.4	44.2	46.4	46.5	46.0	43.5	43.5	41.5	43.4	46.1	56.6	47.7	37.2
差	-4.8	-10.6	-4.7	-5.1	-2.8	-6.8	-9.6	-5.8	-1.7	-4.4	-0.4	3.7	2.6



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

データ22 物理 学力層別 過年度比較（領域別）



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率) * 各領域に該当する設問は 16 ページ参照

データ23 物理 偏差値60, 50前後で正解率格差の大きい設問(単年度集計)

	学力層間の正解率差	
	20%以上	10%以上 20%未満
A層とB層の正解率差が大きい(偏差値60前後で格差のある)設問	第1問2	第1問1
	第2問8	第1問3
	第2問9	第1問4
	第2問10	第2問7
	第2問11	第3問15
	第2問12	第3問17
	第3問13	第4問23
	第3問14	第4問24
	第3問16	
	第4問19	
C層とD層の正解率差が大きい(偏差値50前後で格差のある)設問	第1問1	
	第1問2	
	第2問11	
	第3問13	
	第3問14	
	第3問15	
	第3問16	
	第3問17	
	第4問19	

問2 衝突直後のBの速さはいくらか。 8

v $\frac{1}{5}v$ $\frac{1}{10}v$ $\frac{1}{5}v$ $\frac{2}{5}v$ $\frac{1}{25}v$

問3 衝突によりBがAに及ぼした力積の大きさはいくらか。 9

$\frac{1}{10}mv$ $\frac{1}{5}mv$ $\frac{1}{10}mv$

$\frac{1}{5}mv$ $\frac{2}{5}mv$ mv

問4 衝突によって失われた力学的エネルギーはいくらか。 10

$\frac{11}{40}mv^2$ $\frac{9}{25}mv^2$ $\frac{9}{20}mv^2$

$\frac{1}{20}mv^2$ $\frac{1}{5}mv^2$ $\frac{1}{4}mv^2$

* 正解率(%) = 正解者数 / 受検者数 × 100
 * 学力検査問題の全設問は巻末に掲載

第3問 図5のような円筒容器Cに、なめらかに動くピストンによって単原子分子の理想気体 n [mol]が閉じこめられている。Hは内部の気体を加熱する装置であり、またストッパーによってピストンはそれより左には移動できない。また、単原子分子の理想気体 n [mol]の絶対温度 T における内部エネルギー(気体分子の運動エネルギーの総和) U は、気体定数を R として

$$U = \frac{3}{2}nRT$$

で表されるものとする。

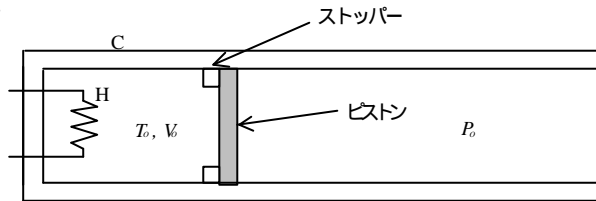


図5

はじめ、この気体の絶対温度は T_0 、体積は V_0 で、気体の圧力は外気圧 P_0 より小さく、ピストンはストッパーに接したままであった。アボガドロ定数を N_0 として次の問い(問1~6)の答えを、それぞれの解答群のうちから一つ選べ。

第3問 13 Cに閉じこめられた気体分子の数はいくらか。

n	$\frac{H}{N_0}$	$\frac{N_0}{n}$
N_0	nR	nN_0

第3問 14 気体分子1個の平均運動エネルギーはいくらか。

$\frac{3}{2} \frac{R}{N_0} T_0$	$\frac{3}{2} RT_0$	$\frac{3}{2} \frac{R}{nN_0} T_0$
$\frac{3}{2} \frac{R}{n} T_0$	$\frac{3}{2} nRT_0$	$\frac{3}{2} N_0 T_0$

領域別に見るとA層では「熱とエネルギー」の正解率が下がっていることがわかる。一方B・C・Dの中間層は、「熱とエネルギー」に加え「力と運動」の領域でも正解率が大きく下がっている。その結果、従来よりも力学で各学力層の差が開いた。力学は物理全体の基礎になる領域であるので、その影響が懸念される。

また、単年度集計でA層とB層の間で差がついた設問を見てみると、論理的思考力や、グラフ・数式の読みとりが必要な設問での差が大きく、リード文が長く、記号や文字での状況設定が多いとつまづきやすいことが分かる。(データ23)

2. 化学

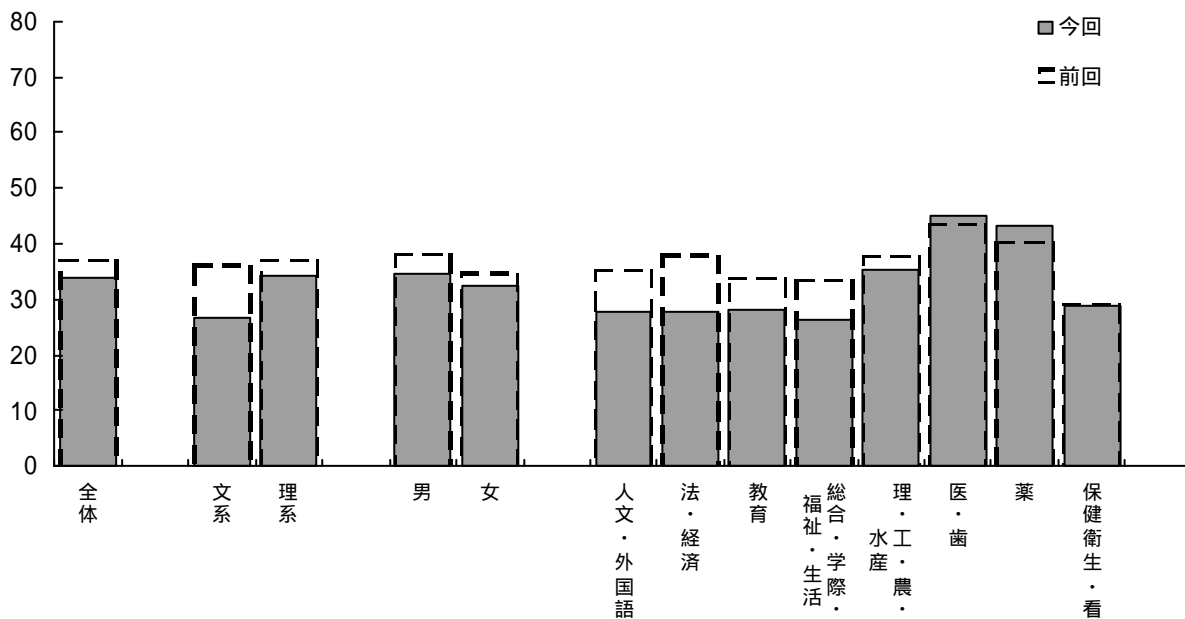
平均正解率は、平成7年度と比較して3.0%低下した。これは偏差値に換算すると約2ポイント低下したことになる。また、文理の平均正解率差は約7%にまで広がった。

志望学部系統別では、医・歯系、薬学系で平均正解率がやや上がり、保健衛生・看護系では、ほとんど変化が見られなかった。理工農系では2%正解率が下がり、文系の各学部系統では全体に5%以上正解率が下がっている(データ24)。

学力層別の過年度比(データ25)を見ると、A・B層では低下率が5%近くになるのに対し、下の学力層になるほど前回からの正解率低下の幅が小さくなっている。その結果として、前回よりも標準偏差は小さくなった。ただし、

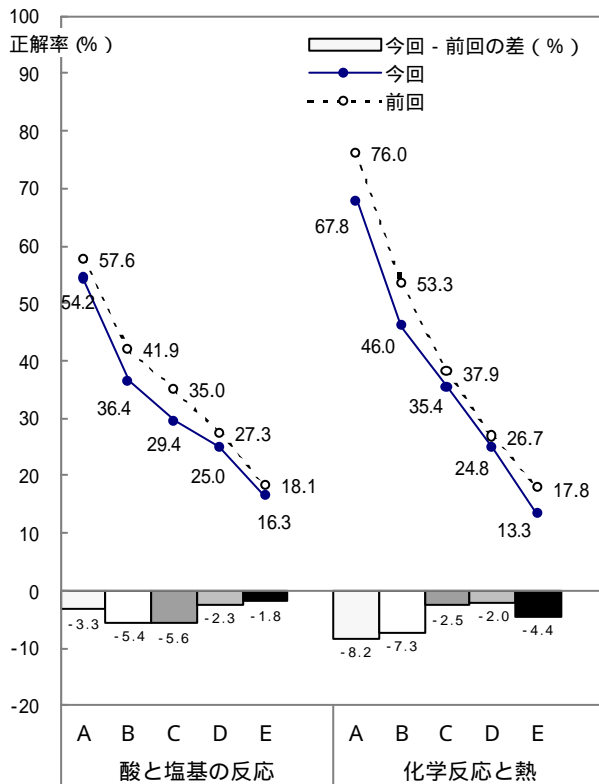
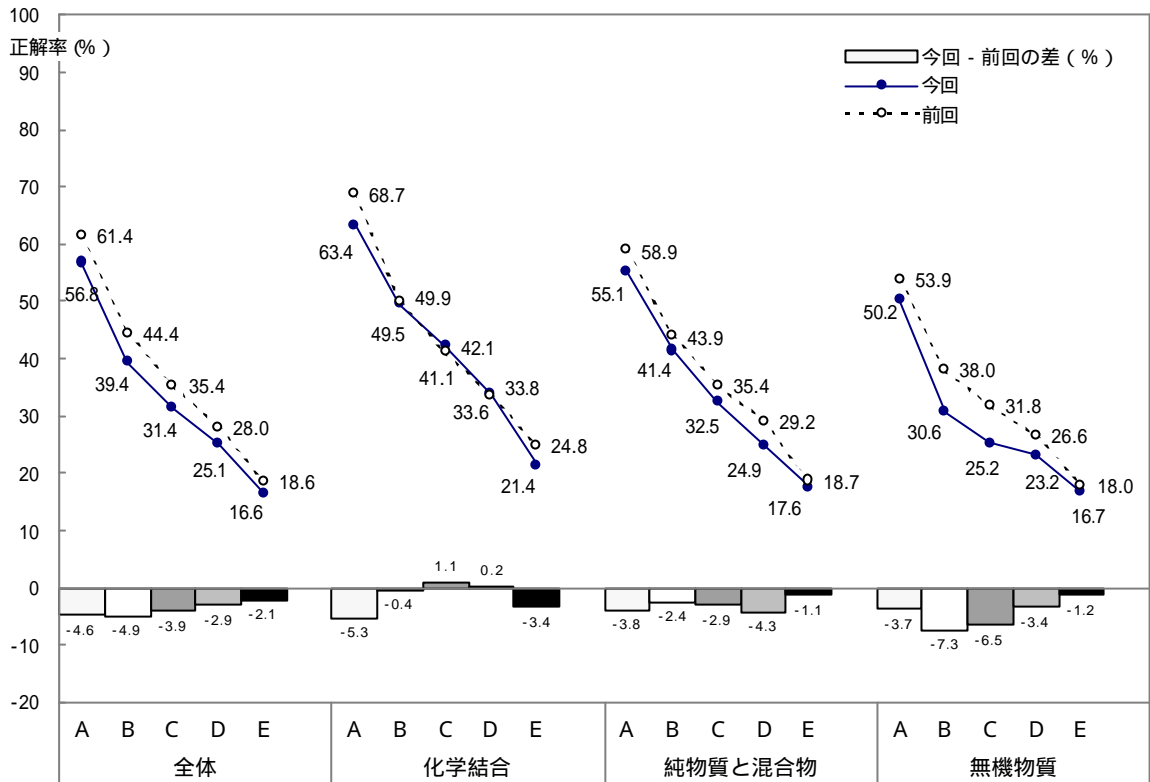
データ24 化学 正解率 概況

化学 正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外 国語	法・経済	教育	総合・学際 福祉・生活	理・工・農 水産	医・歯	薬	保健衛生・ 看護
今回	33.8	26.8	34.1	34.6	32.3	27.8	27.7	28.2	26.2	35.5	45.1	43.1	28.8
前回	36.9	36.0	37.0	38.0	34.6	35.3	37.9	33.6	33.3	37.6	43.3	40.1	29.0
差	-3.0	-9.2	-2.9	-3.3	-2.2	-7.4	-10.2	-5.5	-7.1	-2.1	1.7	3.0	-0.2



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

データ25 化学 学力層別 過年度比較（領域別）



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率)
 * 各領域に該当する設問は 16 ページ参照

化学の平均正解率は他の科目よりも低く、低学力層では、もともと正解率が20%を切る領域がほとんどであったことにも注意すべきである。

学力層間で最も差が開いたのは、「化学反応と熱」の領域である。また、物理・化学ともに、学力上位層であっても正解率が下がっていることが問題点として指摘できよう。

正解率差の大きい設問は、偏差値60前後においては計算問題や文章読解の必要なものが多い。一方、偏差値50前後では、知識問題や基本的な状態方程式の計算問題などで差がついていた。

3. 生物

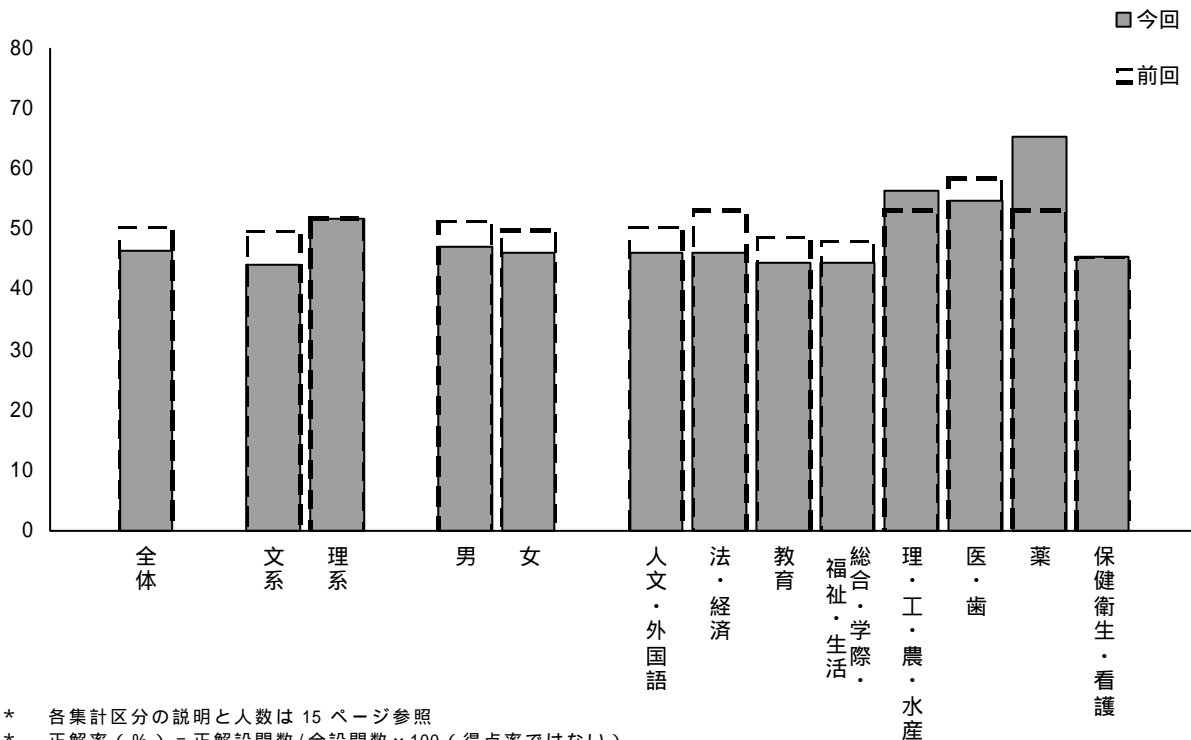
平均正解率は、平成7・8年度と比較して約3.9%低下した。これは偏差値に換算すると約2ポイント低下したことになる。

理科の2科目受験者が前回に比べ（実施時間の制約上）少なかったにもかかわらず、生物の受検率は前回の約40%から今回は約50%に増加した。その中で、理系の正解率は前回と変わらないが、文系では5%以上も低下している。

男女の正解率の差が小さいのも生物の特徴である。志望学部系統別では、薬学系と理工農系で平均正解率が上がり、保健衛生・看護

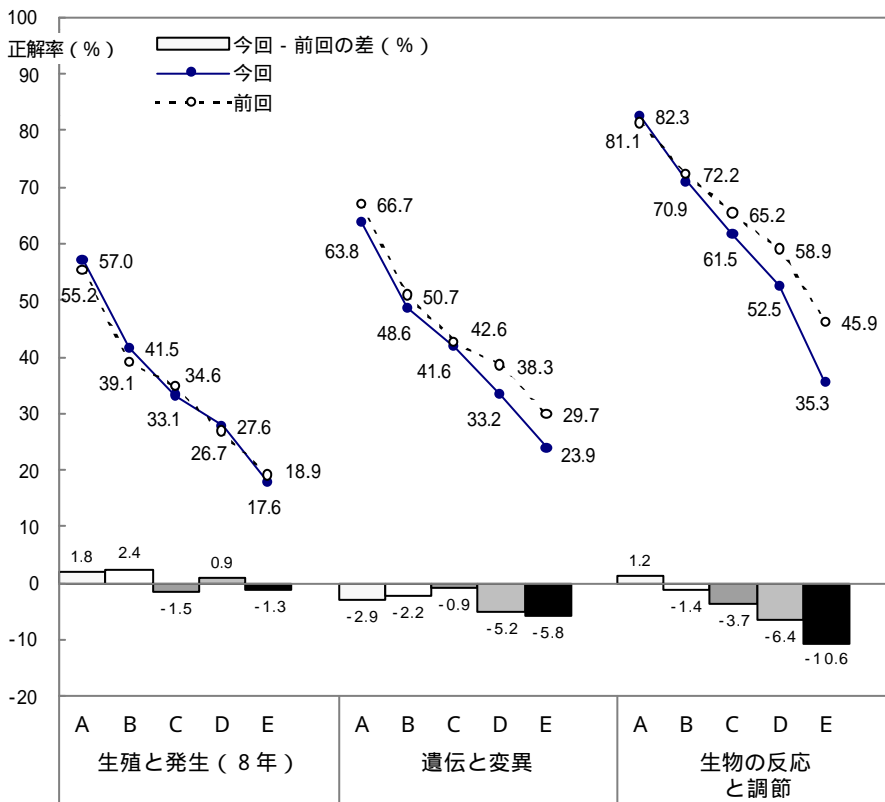
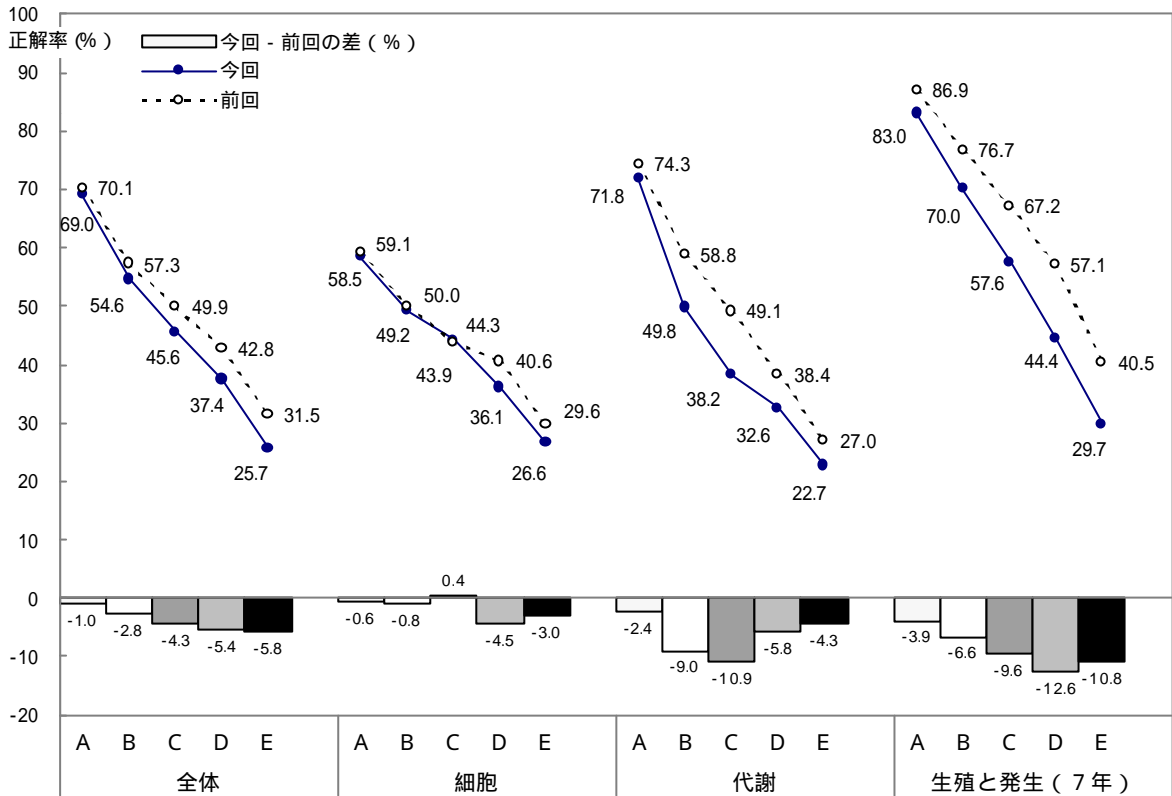
データ26 生物 正解率 概況

生物正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外国語	法・経済	教育	総合・学際・福祉・生活	理・工・農・水産	医・歯	薬	保健衛生・看護
今回	46.5	44.3	51.8	47.0	46.2	46.2	46.3	44.6	44.6	56.4	54.8	65.4	45.4
前回	50.3	49.7	51.8	51.2	49.8	50.3	53.1	48.7	48.1	53.1	58.5	53.2	45.4
差	-3.9	-5.4	0.0	-4.2	-3.6	-4.1	-6.8	-4.1	-3.5	3.3	-3.7	12.2	-0.1



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

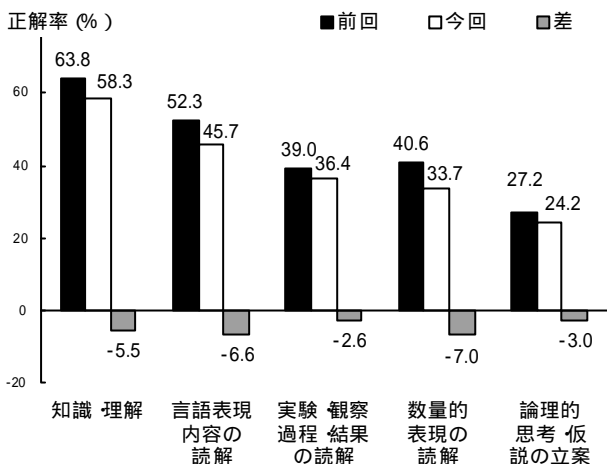
データ2.7 生物 学力層別 過年度比較（領域別）



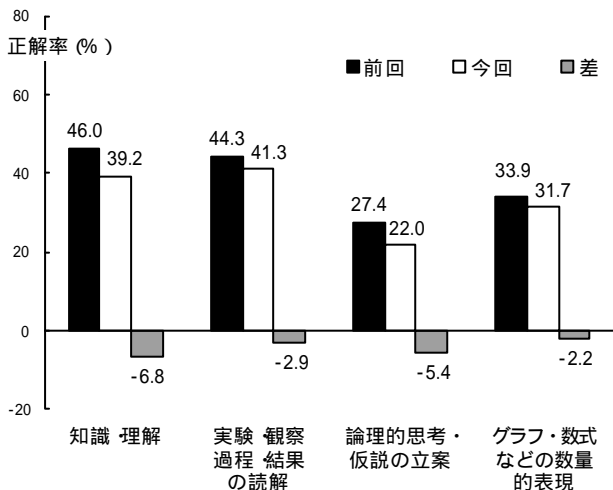
* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率) * 各領域に該当する設問は 17 ページ参照

データ28 理科 学力要件別 過年度比較

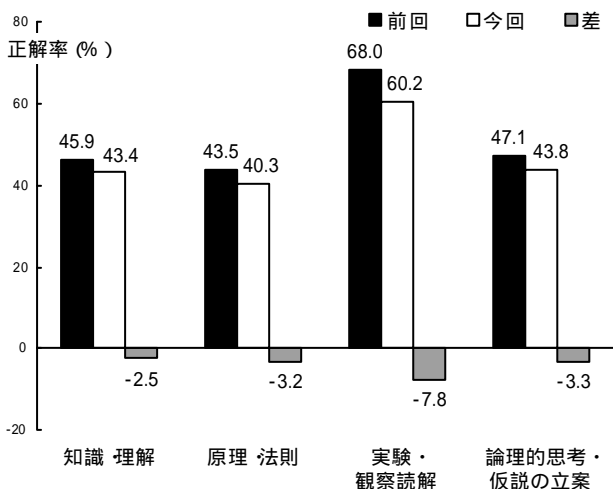
物理



化学



生物



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * 各学力要件に該当する設問は 17 ページ参照

系では横ばいだった。医・歯系学部を含め、他の学部系統の正解率は全て下がっている(データ26)。

生物の領域別正解率は、「細胞」(原形質分離・浸透圧に関する問題)と「生殖と発生(8年度出題分)」であまり下がっていないが、他の「代謝」や「生殖と発生(7年度出題分)」、「遺伝と変異」、「生物の反応と調節」などの分野ではいずれも下がっている(データ27)。

学力層別に見ると、最上位の学力層Aはあまり変化がないが、その下のB・C層で約3~4%下がっており、D・E層では5%以上も正解率が低下している。従って、全体に前回よりも下の方に分布が広がっていることが分かる。上位が下がらずに下位が下がったのは理科の中では生物だけである。

データ28では、理科の各科目における学力要件別の集計結果を掲載した。

物理では、「知識・理解」を主に問うている設問群や、「言語表現内容(問題文)の読解」、「数量的表現の読解」がキーになる設問群での正解率低下が大きい。設問文の読解や文字式の取り扱いが苦手になってきていることがうかがえるが、これは数学にもあてはまる特徴である。

化学では「知識・理解」と「論理的思考・仮説の立案」に分類される設問群の正解率低下が特に目立った。また、この2つの学力要件については、A・B層に限ると10%程度以上も正解率が低下していた。

また、生物は、他の2科目に見られたような「知識・理解」に分類される項目での、大幅な正解率低下は見られなかった。しかし、「実験・観察結果の読解」に関する項目では大幅に正解率が下がっており、特に低学力層ほど正解率の低下が目立った。

第6節 英語

平均正解率は、前回と比較して2%上昇した。これは偏差値に換算すると約1.5ポイント上昇したことになり、今回調査対象の5教科のなかでは唯一正解率が上昇した教科となった。

文系と理系の平均正解率の差は理系が若干高い程度である。女子の平均正解率が男子のそれよりも数%高いが、これは国語でも見られた特徴である。

志望学部系統別では、人文・外国語系、薬学系、保健衛生・看護系などの女子の多い学部系統の平均正解率が大きく上昇し、理工農

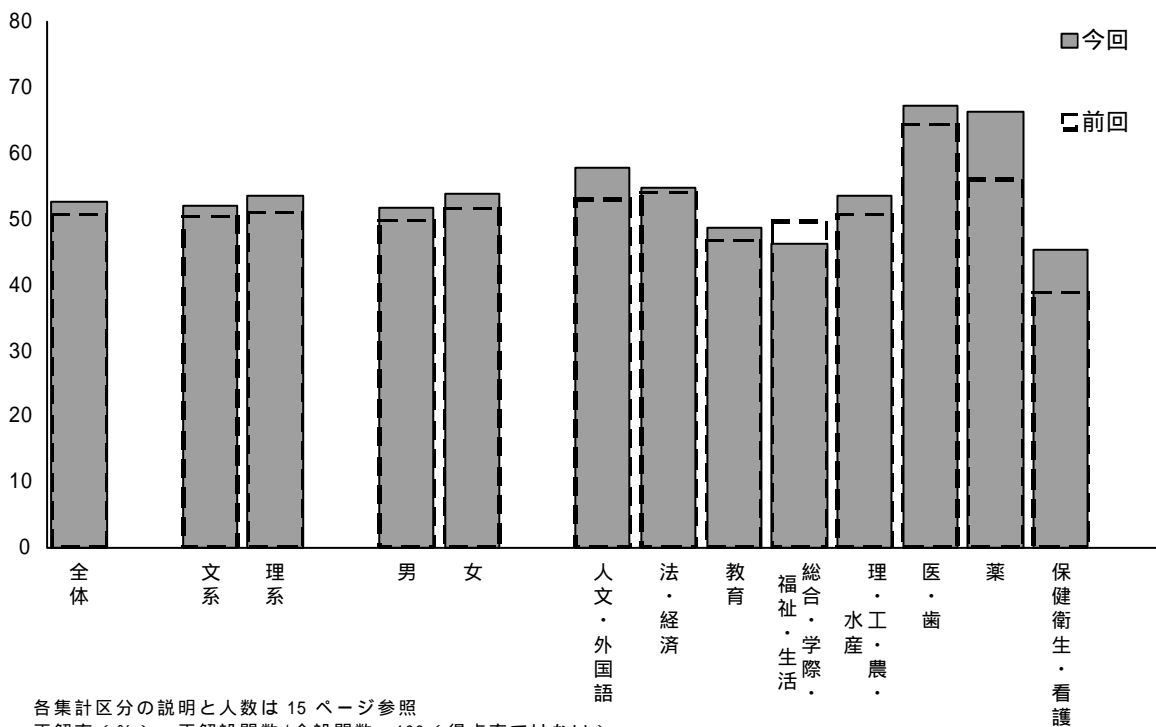
系、医歯系でも上昇した。一方、法・経済系、教育系では平均正解率はそれほど上昇しておらず、総合・学際系では志望人数は増加しているものの、正解率は逆に下がっている（データ29）。

学力層別の過年度比較を見ると、科目全体の平均正解率では、A層とB層で前回に比べて3.5%上昇している。次いでC・D層の正解率も上昇しているが、E層では逆に低下している。その結果、学力層間の正解率格差は前回に比べても大きくなった（データ30）。

領域別では、上位層を特によく弁別している（A層とB層での正解率格差が大きい）のが「語彙」と「リーディング」で、この結果は

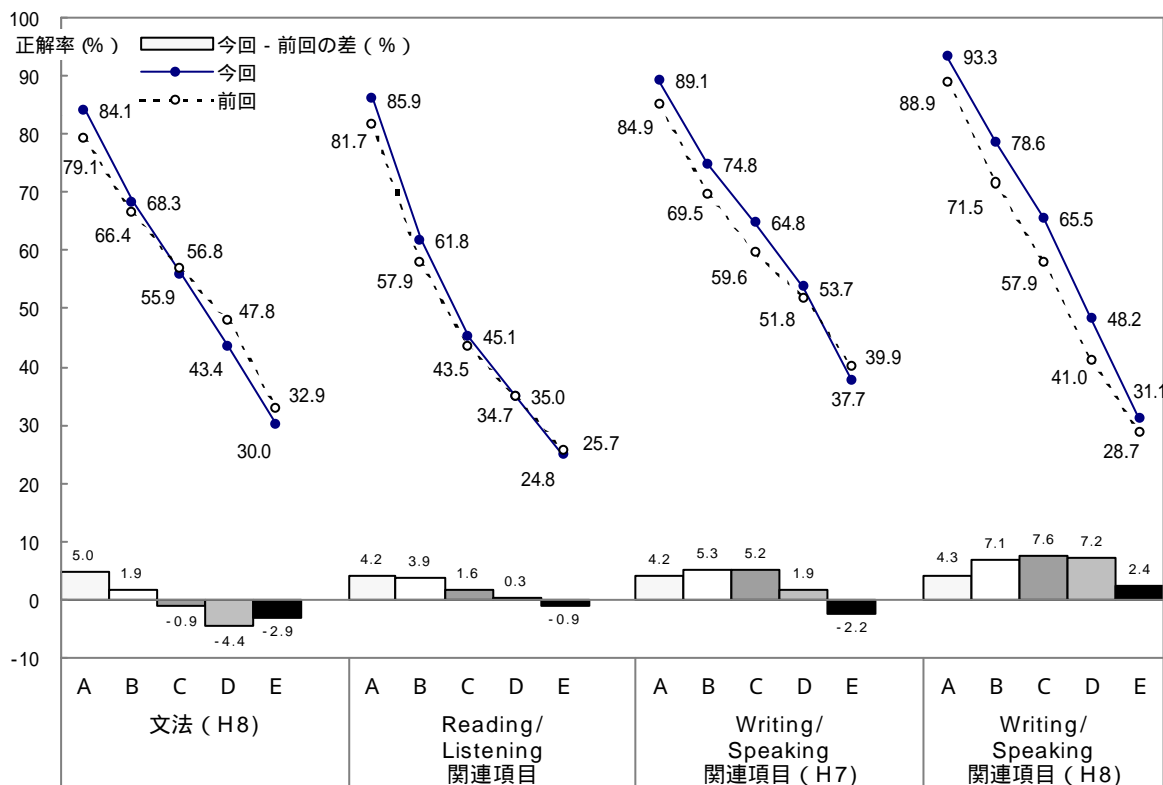
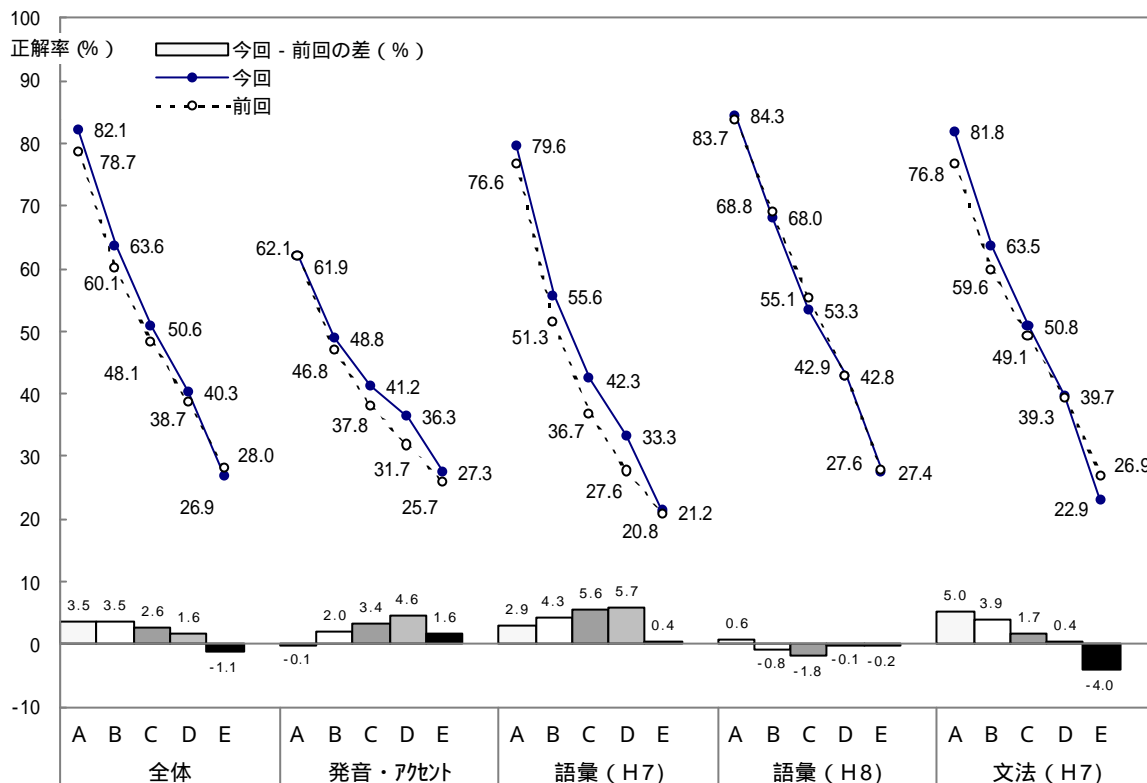
データ29 英語 正解率 概況

英語正解率	全体	文系	理系	男	女	人文・外国語	法・経済	教育	総合・学際・福祉・生活	理・工・農・水産	医・歯	薬	保健衛生・看護
今回	52.7	52.0	53.5	51.7	53.7	57.8	54.8	48.6	46.3	53.7	67.2	66.4	45.3
前回	50.7	50.4	51.1	49.9	51.7	53.0	54.1	46.7	49.6	50.6	64.3	56.0	38.8
差	2.0	1.6	2.4	1.8	2.0	4.8	0.6	1.9	-3.3	3.1	2.9	10.4	6.5



* 各集計区分の説明と人数は15ページ参照
 * 正解率(%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100 (得点率ではない)

データ30 英語 学力層別 過年度比較（領域別）



* 正解率 (%) = 正解設問数 / 全設問数 × 100
 * A B C D E は学力層 (A が高正解率) * 各領域に該当する設問は 17 ページ参照

前回と変わっていない。

学力中間層（C層）において、前回よりも正解率の上昇が目立つ分野は「発音・アクセント」や、「語彙（7年度）」「Writing/Speaking 関連項目（8年度）」であり、現行の指導要領で重視されている領域でもある。これらの領域では、結果として上位層（A層）と中間層

（C層）の間の正解率格差は縮小したものの、中間層と下位層（E層）の間の正解率格差は拡大している。

一方で、上位層（A層）の正解率が大きく伸びているにも関わらず、他の学力層の伸びがそれほどでもなかったために、上位層と中間層・下位層の間での学力格差が広がったの

データ31 英語 偏差値60, 50前後で正解率格差の大きい設問（単年度集計）

	学力層間の正解率差	
	20%以上	10%以上 20%未満
A層とB層の正解率差が大きい(偏差値60以上で格差のある設問)	第2問 A-7	第1問 2
	第2問 A-10	第1問 3
	第2問 A-14	第1問 4
	第3問 A-21～22	第2問 A-5
	第3問 A-23～24	第2問 A-6
	第3問 A-25～26	第2問 A-8
	第3問 B-28	第2問 A-9
	第4問 29	第2問 A-11
	第4問 30	第2問 A-12
	第4問 31	第2問 A-13
	第5問 32	第2問 A-15
	第5問 34	第2問 A-16
	第5問 35	第2問 B-18
		第2問 B-19
		第2問 B-20
		第3問 B-27
		第5問 33
C層とD層の正解率差が大きい(偏差値50以上で格差のある設問)	第2問 B-20	第2問 A-8
		第2問 A-10
		第2問 A-11
		第2問 A-12
		第2問 A-13
		第2問 A-14
		第2問 A-16
		第2問 B-18
		第2問 B-19
		第3問 A-21～22
		第3問 A-23～24
		第3問 A-25～26
		第3問 B-27
		第3問 B-28
		第5問 32
		第5問 33
		第5問 34
	第5問 35	
	第5問 36	

第3問 A-21～22, 23～24, 25～26 次の問い(問1～3)において、それぞれ下の～の語や語句を並びかえて空所を補い、文を完成せよ。ただし、解答は [21]～[26] に入るものの番号のみをマークせよ。

問1 When summer vacation is over, the teacher _____ [21] _____ [22] _____ how they have enjoyed their holidays.
her students makes take
talking about turns

問2 A debate is a kind of discussion, where two teams will choose a controversial topic and then _____ [23] _____ [24] _____ .
discuss it from of
opposite points view

問3 English is now an international language and through it we will be able to communicate, _____ [25] _____ [26] _____ .
come from no matter of the world
we what part

Lately in Japan, the practice of leaving one side of escalators open for passers in a hurry has been spreading. It has been said that in Western countries everyone does that naturally as a custom, and a lot of people seem to appreciate that the Japanese have accepted the custom at last. The fact is, however, there are very dangerous aspects to such a practice.

Those who are physically handicapped feel a sense of anxiety simply standing on escalators. Some of these people are limited in which arm they can use effectively and they can only use escalators by holding firmly on to the handrails with their stronger arm. It is utterly dangerous to force these people to move to one side by setting a standard rule for escalator-users to stand on either the right or the left, because there are some people who are able to stand only on one of the sides. Many elderly citizens and those individuals who are ill or injured also have similar problems.

There is also another problem. Even if these people moved to one side, it would be very dangerous if others rush by when passing them. These people could fall if the escalator steps should shake or if they are bumped by those rushing by. And even if they are not bumped, they will feel extremely tense whenever someone passes them on the escalator and they could begin to fear even going to train stations.

Is there really a need to rush ahead and pass people on escalators? Could you save so much time by doing that? For escalators to be user-friendly, we should give utmost consideration to having the handicapped and the elderly use the escalators without anxiety.

* 正解率(%) = 正解者数 / 受検者数 × 100
* 学力検査問題の全設問は巻末に掲載

は「文法」や「Reading/Listening関連項目」である。領域ごとに、学力層間の学力格差の現れ方に変化が見られる結果となった。

.....

学力層間で正解率差の大きい設問を見ると（データ31）、偏差値60前後では、読解問題と語順整序問題が多い。

共同研究校の先生方からは、「（今回の調査はマークセンス方式であったが）記述式になると読解問題での正解率には、学力層間でさらに差が付くことになるのではないかと、また「国語に見られた読解力の低下は、センター試験の範囲程度であれば英語の読解問題の正解率には影響を与えていないようだが、より難度の高い個別学力試験レベルの問題になると影響が現れてきているようにも思われる」などの指摘もあった。

第7節 考察

学生・生徒の学力が変化（低下）しているのではないかと懸念する声は、高等学校と同様かそれ以上に大学関係者からも聞こえてくる。特に高大接続の場面における学力変化問題を議論するときには、これまで考察してきたような「同一問題の正解率の推移（絶対的な学力の変化）」だけでなく、各大学に入学してくる学生の「全国の受験生の中での位置付けの相対的な変化」にも注意を払う必要がある（データ32）。

このグラフは複数の大学に着目して、横軸に3年生のときの記述式模試（7月と10月に実施、受験者30万人以上）の平均偏差値をとり、縦軸には実際の合否結果に基づく合格率（受験者に占める合格者の割合）を求めてグラフにしたものである。グラフはすべて3本あり、平成3年、8年、11年の3つの年

度で比較してある。

これを見ると、国立A大学（旧帝大）は各偏差値帯の合格率（合格しやすさ）に大きな変化はないが、国立B大学（地方国立大学）は、全体的に平成11年度の合格率が、それ以前に比べてやや上昇している。また、私立C大学では平成11年度の合格率は偏差値帯によっては平成3年度に比べ20%以上も高くなっており、非常に合格しやすくなっていることがわかる。

A大学のような一部の難関大学では、合格率に大きな変動がないものの、多くの大学は生徒減の影響を受けて軒並み合格率が上がり、より低い偏差値帯からの合格者が増えていることが分かる。

一つの大学でこの10年間教えてきた教員から見ると、どんどん学生の学力のすそ野が広がっていると感じざるを得ない状況を引き起こしている。受験生の減少ほどには大学入学定員は減少していないことが、学生の質の相対的な変化（異なる偏差値帯からの流入）を引き起こしている。

.....

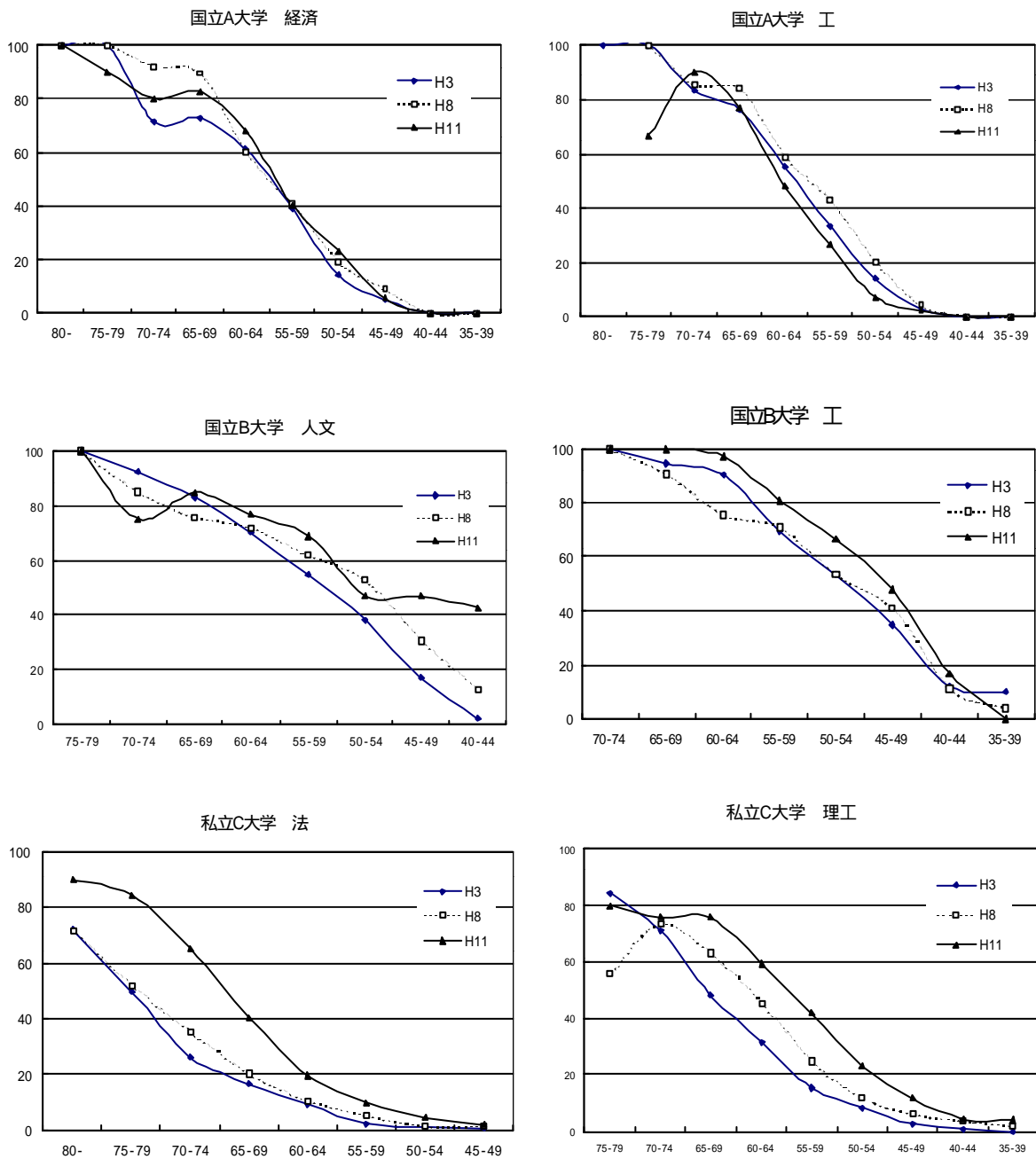
今回の調査からは国語・数学・英語とも教科合計の正解率が大きく下がっているとはいえないが、データの細目を見ると「内容読解（国語）」、「論理的思考力（数学）」、「語彙（英語）」など、明らかに低下しているのではないかとと思われる項目があり、このことは高校だけでなく、大学の授業にも影響を及ぼしていると考えられる。

また、国語・数学・英語以上に、理工系の物理・化学、医・歯系の生物、文系の世界史・日本史の正解率低下が著しいことや、理解度・得意度が極端な低下傾向にあることは重大な課題である。

2003 年度から新しく「総合的な学習の時間」が始まる。これを生徒が「知識の運用力を身につける」、「自分のことや社会のことを知り目標を持つことができるようになる」などに活用できれば教科学力の向上にも好影響を及ぼすのではないだろうか。「総合的な学

習の時間」という名称こそ付けていないが、既に先導的に取り組んでいる一部の高校では成果が出始めている。「総合的な学習の時間」は小学校3年生から高等学校まで長期にわたって導入されるだけに、各学校段階での接続が大きな鍵であると考える。

データ32 同一大学における偏差値帯別 合格率の推移



縦軸；合格率 (%) = 合格者数 / 受験者数 × 100

横軸；進研模試 (3年7月・10月記述) における偏差値帯

また、新教育課程の導入で学習内容がさらに変化する中学生に対しては、その変化を的確に把握するためにも、中高接続の取り組みが有効なのではないだろうか。

既に、いくつかの地域では様々な試みがなされている。説明会、公開授業、出張講座、PR活動など、生徒が入学してくるのを待っているのではなく、入学前から意識づけの面で働き掛けをすることも重要だろう。

高大接続の観点から見ると、各大学がアドミッションポリシーをきちんと高等学校に発信し、そのアドミッションポリシーに基づいて、大学入学後の学習に必要な教科・科目を入試で課すことは、その大学を志望する高校生の学習へのモチベーションを高めるために有効な手段である。

大学の先生が学生に求める能力・資質としては「思考力や表現力を重視している」という調査結果もでている(ex.ベネッセ文教総研『教育改革と人材育成の方向性』1999年版、2000年版；本報告書の第5章135ページでも一部紹介)が、実際の入試では、必ずしもそれらの力を十分に評価しているとは言い難い状況がある。入試は大学にとっては選抜の意味合いが強いらろうが、高等学校にとっては教育内容の規定要因として強く働く。高大の教育内容の連動を図り、学生への教育効果を高める観点からも、入試問題の中身は「知識量を問う内容」から「獲得した知識を活用して、それを運用する力を測定する方向」に主眼を移す必要があると考える。